ISSN 2189-4787

浦幌町立博物館

紀要

第20号

『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
（1972～1996）継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

目　　次

荒　川　和　子：浦幌町立博物館所蔵の2019年度採集の蝶標本 …… 1
須　摩　靖　彦：帯広農高カシワ天然林のトビムシ類 …… 9
持　田　　誠：活平神社に関する一考察 …… 15
持　田　　誠：活平神社に残る丸岡キサノ奉納の絵馬 …… 21

〔採集記録・観察記録〕
円　子　紳　一：浦幌のウチダザリガニ駆除（2018年・2019年） …… 31
円子紳一・持田誠：浦幌川におけるモクズガニの記録 …… 33
持田誠・百瀬邦和：北海道十勝地方浦幌町でのウズラの確認記録 …… 35

〔資料紹介〕
三浦直春・大和田努　解読：大正十五年・昭和元年　教育雑件　浦幌村役場（その5）… 39

2020
3

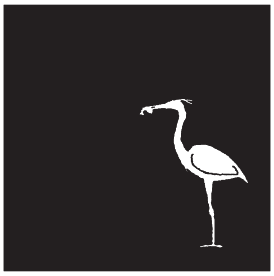
北　海　道
浦　幌　町　立　博　物　館

ISSN 2189-4787

浦幌町立博物館

紀要

第20号



『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
（1972～1996）継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

2020
3

北海道
浦幌町立博物館

浦幌町立博物館所蔵の2019年度採集の蝶標本

荒川和子[1)]

Kazuko ARAKAWA, 2020. Butterfly 2019 collection of The Hisotorical Museum of Urahoro.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 1-7.

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
アゲハチョウ科　Papilionidae						
ﾋﾒｳｽﾊﾞｱｹﾞﾊ(ﾋﾒｳｽﾊﾞｼﾛﾁｮｳ) *Parnassius hoenei* (SCHWEITZER, 1912)						
1597	2020- 13	1	60	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6. 2	荒川和子
シロチョウ科　Pieridae						
モンシロチョウ *Pieris rapae* (LINNAEUS,1758)						
1598	2020- 1	1	48	北海道十勝郡浦幌町南町	2019.8.17	荒川和子
1599	2020- 2	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.9. 1	干場竣月
モンキチョウ *Colias erate* (ESPER, 1805)						
1600	2020- 3	1	46	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2019.6. 2	荒川和子
1601	2020- 4	4	39～48	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.7.28	荒川和子
1602	2020- 5	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.17	荒川和子
1603	2020- 6	3	43～55	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.31	干場竣月
1604	2020- 7	1	47	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.9. 1	干場竣月
エゾスジグロシロチョウ *Pieris dulcinea* (BUTLER, 1882)						
1605	2020- 9	2	47	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.5.23	荒川和子
1606	2020- 10	1	47	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2019.7.28	荒川和子
1607	2020- 11	2	43～45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.7.29	荒川和子
スジグロシロチョウ *Pieris melete* (MÉNÉTRIÈS, 1857)						
1608	2020- 8	1	47	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6.28	荒川和子
ヒメシロチョウ *Pieris melete* (MÉNÉTRIÈS, 1857)						
1609	2020- 12	1	39	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.7.29	荒川和子
セセリチョウ科　Hesperiidae						
コキマダラセセリ *Ochlodes venatua* (BREMER & GREY, 1852)						
1610	2020- 15	1	30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.7.28	荒川和子
1611	2020- 16	1	31	北海道十勝郡浦幌町東山	2019.7.29	荒川和子
イチモンジセセリ *Parnara guttata* (BREMER & GREY, 1852)						
1612	2020- 14	1	33	北海道十勝郡浦幌町南町	2019.7.29	荒川和子
キマダラセセリ *Potanthus flavus* (MURRAY,1875)						
1613	2020- 17	1	31	北海道十勝郡浦幌町東山	2019.7.29	荒川和子
チャマダラセセリ *Pyrgus maculatus* (BREMER & GREY, 1852)						
1614	2020- 18	1	20	北海道十勝郡浦幌町東山	2019.5.23	荒川和子
ミヤマセセリ *Erynnis montanus* (BREMER, 1861)						
1615	2020- 19	1	33	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.5.23	荒川和子
タテハチョウ科　Nymphalidac						
ギンボシヒョウモン *Speyeria aglaja* (LINNAEUS, 1758)						
1616	2020- 22	1	53	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.17	荒川和子

1) 〒089-5617　北海道十勝郡浦幌町字南町

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
オオウラギンスジヒョウモン　*Argyronome ruslana*　(MOTSCHULSKY, 1866)						
1617	2020- 23	1	58	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.27	荒川和子
ヒメアカタテハ　*Vanessa cardui*　(LINNAEUS, 1758)						
1618	2020- 20	1	50	北海道十勝郡浦幌町南町	2019.8.12	荒川和子
1619	2020- 21	1	41	北海道十勝郡浦幌町南町	2019.9.14	荒川和子
アカマダラ　*Araschnia levana*　LINNAEUS						
1620	2020- 24	1	27	北海道十勝郡浦幌町東山	2019.5.23	荒川和子
1621	2020- 25	1	30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6. 2	荒川和子
1622	2020- 26	1	34	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.9. 1	干場竣月
サカハチチョウ　*Araschnia burejana*　BREMER,1861						
1623	2020- 27	1	35	北海道十勝郡浦幌町東山	2019.5.23	荒川和子
1624	2020- 28	1	29	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.5.23	荒川和子
1625	2020- 29	1	32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.17	荒川和子
フタスジチョウ　*Meptis rivularis*　(SCOPOLI, 1763)						
1626	2020- 30	1	41	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6.25	荒川和子
1627	2020- 31	1	46	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.7.29	荒川和子
コムラサキ　*Apatura metis*　FREYER, 1829						
1628	2020- 34	1	60	北海道十勝郡浦幌町炭山	2019.9. 3	荒川和子
サトキマダラヒカゲ　*Neope goschkevitschii*　(MENETRIES, 1857)						
1629	2020- 32	1	57	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2019.6.25	荒川和子
1630	2020- 33	1	55	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6.25	荒川和子
クロヒカゲ　*Lethe diana*　(BUTLER, 1866)						
1631	2020- 40	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.27	荒川和子
シロオビヒメヒカゲ　*Coenonympha diana*　(BUTLER, 1866)						
1632	2020- 41	2	31～32	北海道十勝郡浦幌町万年	2019.6. 2	荒川和子
1633	2020- 42	1	33	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2019.6. 2	荒川和子
ヒメウラナミジャノメ　*Ypthima argus*　BUTLER, 1866						
1634	2020- 43	1	35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6.25	荒川和子
1635	2020- 44	1	36	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6.26	荒川和子
1636	2020- 45	1	37	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.7.28	荒川和子
ジャノメチョウ　*Minois dryas*　(SCOPOLI,1763)						
1637	2020- 35	1	51	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.7.28	荒川和子
1638	2020- 36	1	49	北海道十勝郡浦幌町万年	2019.7.28	荒川和子
1639	2020- 37	1	57	北海道十勝郡浦幌町万年	2019.7.29	荒川和子
1640	2020- 38	1	61	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.17	荒川和子
1641	2020- 39	2	51～59	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.8.18	荒川和子
シジミチョウ科　Lycaenidae						
ツバメシジミ　*Everes argiades*　(PALLAS, 1771)						
1642	2020- 46	2	24～26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6. 2	荒川和子
1643	2020- 47	1	25	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6. 3	荒川和子
1644	2020- 48	1	28	北海道十勝郡浦幌町南町	2019.7.28	荒川和子
ベニシジミ　*Lycaena phlaeas*　(LINNAEUS, 1761)						
1645	2020- 50	1	31	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6.25	荒川和子
ルリシジミ　*Celastrina argiolus*　(LINNAEUS, 1758)						
1646	2020- 49	1	24	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2019.6.25	荒川和子

参　考　文　献

白水　隆.　2006.　日本産蝶類標準図鑑. 336pp. 学習研究社,　東京.
堀　繁久・桜井正俊. 2015.　昆虫図鑑北海道の蝶と蛾. 422pp. 北海道新聞社,　札幌.
永盛俊行・永盛拓行・芝田　翼・黒田　哲・石黒　誠. 2018.　完本 北海道蝶類図鑑. 396pp. 北海道大学出版会,　札幌.

ヒメウスバアゲハ（ヒメウスバシロチョウ）

モンシロチョウ

モンキチョウ

エゾスジグロシロチョウ

スジグロシロチョウ

ヒメシロチョウ

コキマダラセセリ

イチモンジセセリ

キマダラセセリ

チャマダラセセリ

ミヤマセセリ

ギンボシヒョウモン

オオウラギンスジヒョウモン

アカタテハ

アカマダラ

サカハチチョウ

フタスジチョウ

コムラサキ

サトキマダラヒカゲ

クロヒカゲ

シロオビヒメヒカゲ

ヒメウラナミジャノメ

ジャノメチョウ

ツバメシジミ

ベニシシミ

ルリシジミ

帯広農高カシワ天然林のトビムシ類

須摩靖彦[1)]

Yasuhiko Suma. 2020. Collembola fauna in the natural oak (*Quercus dentata*) forest
in the Obihiro High School of Agriculture.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro. 20: 9-14.

はじめに

トビムシは節足動物門、昆虫亜門（六脚亜門）、内顎綱、トビムシ目（粘管目）に属する無翅のグループである。体長はわずか１～２mm程度で、主に土壌中や地表面に生息するが、樹上、洞穴、水面、雪面、アリの巣内、海岸の漂着海藻などにも生息し、海岸から高山まで、熱帯から極地域までさまざまなところに生息する。形態的に昆虫と同じく頭部、胸部、腹部の３部からなり、胸部腹面に３対の肢を備える。胸部背面に翅がないので飛ぶことはできないが、種により腹部腹面に強力な跳躍器を備えで体長の数十倍を跳ねることができる。しかし、土壌中の種は跳躍器のない種や未発達の跳べない種が多い。すべてのトビムシに共通な器官は腹部第１節の腹面に腹管（粘管）と呼ばれる器官を持つのが最大の特徴で、この器官で他物に付着して体を安定にする。また、個体数が多く（個体密度が高い）、普通地表面１㎡当り成虫・幼虫を含め３万～５万個体が生息するので、環境指標に利用される。なお、日本では約300数十種のトビムシが報告され、すべての種が図とその記載がなされている（青木 2015）。

十勝地方からのトビムシは、これまで菱 拓雄や筆者らにより足寄町を中心に13科94種のトビムシが報告されている（Hishi, *et al.* 2012; Uchida et Suma 1973; 須摩 1984,1994,1995; 須摩・山崎 2013）。

今回の報告は、帯広市内の道路の拡幅工事により天然カシワ林の伐採のため、その影響の事前環境調査である（帯広市, 2016）。その調査の際に採取された土壌サンプルからトビムシが多数抽出され、その液浸標本の提供を受けた。そのトビムシ類を基にして報告するものである。

図１．帯広農高カシワ林と調査地 ○

写真１．北側林縁エリアの景観（撮影：大西 純氏）

調査地の概要と方法

調査地の「帯広農高カシワ天然林」は帯広市稲多町西１線８の１の文教・住宅地に位置し、標高約70m、面積11.91haのカシワを主な樹種にした自然林である（図１）。文教・住宅地内の孤立した自然林とは言え今ではこの地方の原風景であり、数少ない自然林である

1) 〒085-0813　釧路市春採６丁目7-32

ことから、北海道は昭和49年（1974年）３月30日に環境緑地保護地区「帯広農高カシワ天然林」として一画を指定し、保護している。

今回の調査地（帯広圏都市計画道路３・３・47学園通、調査範囲延長274m×幅40m＝10.960㎡）は、帯広農高カシワ天然林の北側に位置するところで、学園通りの道路に面するところである。調査地を異なる環境状態の特徴を西から「北側林縁エリア」、「段丘エリア」、「湿性林エリア」の３エリアに分け、そのエリアからそれぞれ複数の土壌サンプルを採取した。３エリアの地形・植生の特徴は以下の通りである（帯広市2016）。

北側林縁エリア：全体に平坦な地形、植生としては高木層～亜高木層にはカラマツ、カシワ、ミズナラ、ハリギリ、低木層～草本層にはミヤマザクラ、ホオノキ、ナナカマド、ヤマウルシ、オニグルミ、ネムロブシダマ、ヤマハギ、ミヤコザサ、オオヨモギ等が生育している（写真１）。

段丘エリア：地形は高低差５～６m程度の段丘斜面となっている。植生としては、高木層～亜高木層にはヤチダモ、ミズナラ、低木層～草本層にはエゾノコリンゴ、ヤマグワ、ミヤマザクラ、ケヤマウコギ、ヤマブドウ、アキタブキ、ミヤコザサ等が生育している。

湿性林エリア：全体に平坦な地形になっている。エリア内には神社の川を水源とした池や湿地地帯が分布している。植生としては、高木層～亜高木層にはカシワ、ミズナラのほか、池や湿地周辺にはハンノキが分布している。低木層～草本層にはノリウツギ、キタコブシ、クサソテツ、アキタブキ、ミヤコザサ、イネ科等が生育している。

採取した土壌サンプルは地表面（リター層･土壌層）を無定量に、それぞれ約１リットルを採取した（比較検討するため出来るだけ等しい量の土壌サンプルを採取した）。広い北側林縁エリアから４土壌サンプル（サンプル記号①②⑤⑥）、段丘エリアから２土壌サンプル（サンプル記号③⑦）、湿性林エリアから２土壌サンプル（サンプル記号④⑧）の合計８土壌サンプルである。なお、土壌サンプルの採取位置は各エリア内のほぼ中央とし、サンプル①～④が学園通りの道路端から約５mのところで、それらのサンプルを「前列サンプル①～④」とし、一部林縁植生も含む。また、サンプル⑤～⑧の位置は、学園通りの道路端から約15mの奥地ところで、これらを「後列サンプル⑤～⑧」とし、主にカシワを主体とした高木林で、「環境緑地保護地域」として保全されている天然カシワ林である。

調査日（土壌サンプル採取日）は2016年10月15日である。

採取したそれぞれの土壌サンプルは直ちにツルグレン装置にかけ、土壌動物を抽出した。抽出時間は２～３日を要し、抽出された土壌動物は100％イソプロパノールで固定保存した。固定保存された液浸より、ピペットでトビムシをすべて分け取り、ホイヤー液を封入剤として１～７枚の集合プレパラートを作製した（青木 2006）。プレパラートは24枚（No.5109～5132）で、トビムシ標本（プレパラート）は筆者が保管している。

結果と考察

今回の３エリア、８土壌サンプルから11科39種（sp. cf. 幼虫を含む）、1,316個体のトビムシがツルグレンにより抽出され、その内種まで同定されたのは、10科21種であった。これらより幾つかの知見が得られたので、項目に分け考察する。なお、巻末に土壌サンプル①～⑧別のトビムシとその個体数を掲げた（別表）。

１．全トビムシの科構成、種構成の特徴

科構成はツチトビムシ科が９種913個体（全体の69.4％以下同じ）で、個体数で７割近くを占めた（図２）。次にシロトビムシ科（７種）、ムラサキトビムシ科（２種）、アヤトビムシ科（５種）がそれぞれ個体数は114個体（8.7％）、104個体（7.9％）、68個体（5.2％）と続いた。これまでどの調査地もツチトビムシ科が多いが、今回は他の調査地よりツチトビムシ科の個体が少し多い科構成であった（他は全体の50～60％）（須摩 2019）。

種構成はツチトビムシ科のコサヤツメトビムシ（成虫、幼虫を含め）の752個体（57.1％）で、半分以上占めた（図３）。次に同科のハイイロツチトビムシ、シロトビムシ科のヤツメシロトビムシ、ムラサキトビムシ科のカッショクヒメトビムシの順でそれぞれ116個体（8.8％）、70個体（5.3％）、63個体（4.8％）である。この様にコサヤツメトビムシが全個体数の半分以上占めたのが最大の特徴であった。他の調査地では、ツチトビムシ科のベソッカキトビムシなどのフォルソムトビムシ属が優占種となるが、帯広農高カシワ天然林はコサヤツメトビムシが最優占種となった。

２．３エリア別のトビムシの特徴

北側林縁エリア、段丘エリア、湿性林エリアの３エリア毎のトビムシの種数・個体数を見てみた。なお、北側林縁エリアの土壌サンプルが４サンプルなので（他は２サンプル）、半分にして他の２エリアと比較検討した。その結果、北側林縁エリアのトビムシ種数は21種で個体数が77.5個体、段丘エリアの種数は24種で個体数が227個体、湿性林エリアの種数は27種で個体数が934個体であった（図４）。特に、湿地林エリアの個体数は全体の71％を占めた。これらから、北側林縁エリアより段丘エリアが、それより湿性林エリアにトビムシ種数が多くなり、個体数は３倍、12倍と多くなった。このことから、トビムシにとって湿性林エリアが良好な環境と言える。

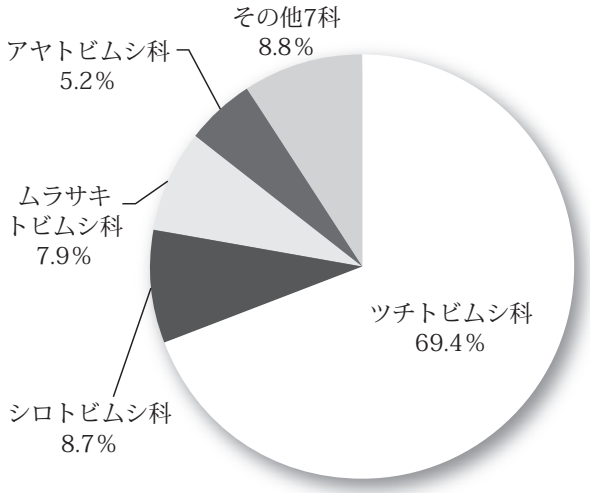


図２．トビムシの科構成（％）

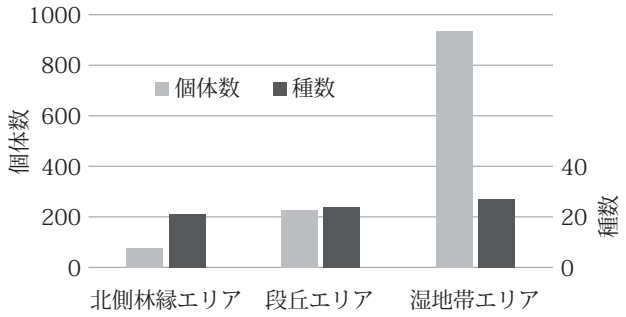


図４．各エリアのトビムシ種数・個体数
（個体数は左目盛り、種数は右目盛り）

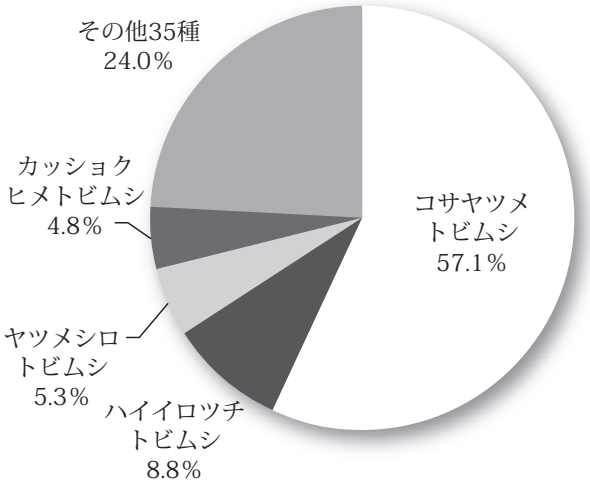


図３．主なトビムシの種構成（％）

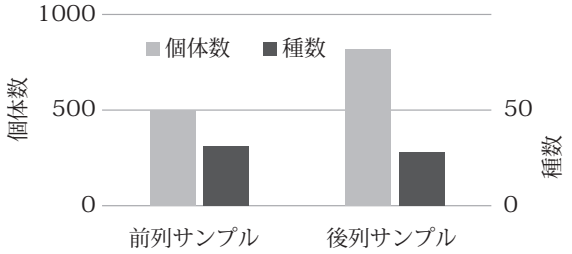


図５．前列・後列土壌サンプルのトビムシ種数・個体数
（個体数は左目盛り、種数は右目盛り）

その内、最優占種であるコサヤツメトビムシは北側林縁エリアではゼロ、段丘エリアではその地の19.4％

であったが、湿地林エリアにおいてはその地の76.0％を占め、この湿地林エリアでも最優占種であった。

他の種では、オゼフォルソムトビムシが段丘エリアで多く、アヤトビムシ科（４種）は段丘エリアと湿地林エリアに多く、ヒメマルトビムシ属の一種は北側林縁エリアに偏っていた（別表）。この様にエリア毎の種の偏り特徴も多少あった。また、比較的個体数が多く、３エリアに広く分布していたのは、ムラサキトビムシ科のカッショクヒメトビムシ（個体数順４位、以下同じ）とコオニムラサキトビムシ（６位）、シロトビムシ科のヤツメシロトビムシ（３位）、ツチトビムシ科のハイイロツチトビムシ（２位）であった。

３．前列と後列土壌サンプル別のトビムシの特徴

土壌動物は各園通りの道路面から太陽光、風と湿度や自動車の排気ガス等の影響を考えて、道路端から約５ｍのところから採取した前列サンプル①～④と、道路端から約15ｍの奥地のところから採取した後列サンプル⑤～⑧の２グループに分け比較検討をした。その結果、前列サンプル①～④からはトビムシ31種、497個体、後列サンプル⑤～⑧からは28種、819個体であった（図５）。トビムシ種数には大きな差はないが、個体数の差が大きいことから太陽光などの光・風・湿度や自動車の排気ガス等の影響が表れたと思われる。最優占種のコサヤツメトビムシは前列サンプルから307個体（40.8％）、後列サンプルから445個体（59.2％）であり、道路端から遠い後列が多かった。オゼフォルソムトビムシ（個体数順７位）は後列サンプルからだけであった。この種は明るいところより、暗いところを好む種と思われる。

これらのことから、樹木の伐採が土壌動物に少なからず影響を与えることが十分予想される。

４．特徴あるトビムシ

今回の調査で同定されたのは、10科21種であった。その内十勝管内未記録種は以下の２種である。

ヤマトビムシ亜科のニッポンチビヤマトビムシ *Micranurida japonica* Tamura, 1998が３個体と、トゲトビムシ科のキノシタトゲトビムシ*Tomocerus* (*Tomocerus*) *kinoshitai* Yosii, 1946 が１個体で、２種とも湿地林エリアであった。これにより十勝地方からのトビムシ種数は13科96種になった。

特徴ある種として、ツチトビムシ科のコサヤツメトビムシである（写真２）。一般に、ツチトビムシ科のベソッカキトビムシなどのフォルソムトビムシ属が優占種となるが、今回の帯広農高カシワ天然林はコサヤツメトビムシが最優占種となった。

次にヤマトビムシ亜科のシリトゲトビムシ亜属の一種*Friesea* (*Friesea*) sp. である（図６）。シリトゲトビムシ亜属は日本から跳躍器端節のないヤマトシリトゲトビムシが１種報告されている。今回、同亜属で跳躍器端節のある種が千歳市泉沢に引き続き見つかった（須摩・松本 2016）。この種は今回が北海道内２か所目であり、道内の落葉広葉樹林に広く分布していると思われる。今回は全エリアから23個体（体長0.6～1.2mm）が抽出された。

写真２．コサヤツメトビムシ

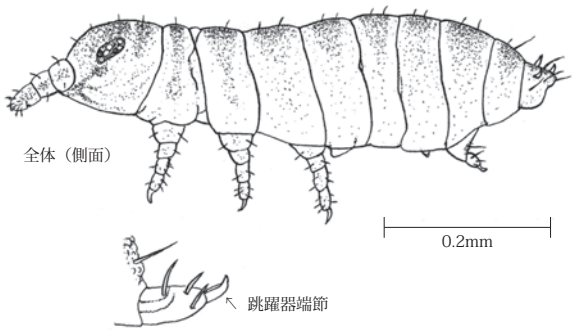


図６．シリトゲトビムシ属の一種（須摩他，2016）

要　約

1）11科39種（sp. cf. を含む）、1,316個体のトビムシがツルグレンにより抽出され、その内種まで同定されたのは、10科21種であった。
2）科構成はツチトビムシ科が９種913個体（全体の69.4％）で、個体数で全体の７割近くを占めた。
3）種構成はツチトビムシ科のコサヤツメトビムシ（成虫、幼虫を含め）の752個体（57.1％）で、全体の６割近くを占め、最優占種であった。
4）３エリア別の種数・個体数から、北側林縁エリアより段丘エリアが、それより湿性林エリアがトビムシにとって、良好な環境であった。最優占種のコサヤツメトビムシは湿地林エリアで76.0％を占めた。
5）前列と後列別では個体数の差が大きいことから太陽光などの光・風・湿度や自動車の排気ガス等の影響が表れたと思われ、樹木の伐採が土壌動物に影響を与えることを示す。
6）十勝管内未記録種はニッポンチビヤマトビムシとキノシタトゲトビムシの２種であった。十勝地方からのトビムシ種数は２種を含め13科96種になった。
7）シリトゲトビムシ亜属の一種 *Friesea* (*Friesea*) sp.が千歳市泉沢に引き続き見つかり、道内２か所目になった。

謝　辞

今回の報告は帯広農高カシワ林の事前環境調査のため、調査された大西 純氏（河西郡更別村）からトビムシ液浸の提供を受けたものである。その提供に対して感謝申し上げる。また、氏からはまとめるに当たり数々の助言を頂き、そのうえ調査地の写真もお借りした。合わせて大西氏にお礼を申し上げる。

渡部友子氏（市立札幌清田高等学校）にはトビムシ同定の際、多大なご援助を頂いた。氏に深謝する。

参考文献

青木淳一. 2006. だれでもできるやさしい土壌動物のしらべかた－採集・標本・分類の基礎知識－. 122pp. 合同出版株式会社．東京.

青木淳一編著. 2015. 日本産土壌動物－分類のための図解検索（第二版）．1969pp. 東海大学出版部. 神奈川.

Hishi, T., Toshiro, N., Maeda, Y., Inoue, S., Cho, K., Yamauchi, K., Ogata, T., Mabuchi, T. 2012. Soil depth distribution and the patterns of alpha-and beta-diversity of families of soil Collembola in cool-temperate deciduous natural forests and larch plantations of northern Japan. Edaphologia, 91: 9-20.

日本土壌動物学会編. 2007. 土壌動物学への招待－採集からデータ解析まで．261pp. 東海大学出版会. 神奈川.

帯広市. 2016. 帯広圏都市計画道路３・３・47学園通環境調査委託に係る調査報告会：1-12. 帯広市役所都市建設部土木課.

大西 純. 2017. ササラダニに魅せられて（その７－農高カシワ林のササラダニ類－）．十勝自然保護協会ニース152: 10.

須摩靖彦. 1984. V．道東海岸線のトビムシ相．道東海岸線総合調査報告書：127-148. 釧路市立博物館, 釧路.

須摩靖彦. 1993. 阿寒国立公園の樹上性トビムシについて－1991～1992年調査－．*Sylvicola*, 11: 17-26.

須摩靖彦. 1994. 第１項トビムシ目．阿寒国立公園の自然1993：1004-1026、1097-1104. 前田一歩園財団, 阿寒町.

須摩靖彦. 1995. 第１節トビムシ目．阿寒国立公園昆虫目録：11-15、43-49. 前田一歩園財団, 阿寒町.

須摩靖彦. 2019. 福島県猫魔ヶ岳のトビムシ類. *InsecTOHOKU*, 49: 2-7.

須摩靖彦・松本直幸. 2016. 北海道千歳市で見つかった本邦未記載シリトゲトビムシ亜属の一種 *Friesea* (*Friesea*) sp. について．*Jezoensis*, 42: 115-119.

須摩靖彦・山崎穂菜美. 2013. ライトトラップで採集された北海道未記録のタテジマアヤトビムシ. *Jezoensis*, 39: 94-100.

Uchida, H. and Suma, Y. 1973. Descriptions and records of Collembola from Hokkaido IV. *Kontyu*, 41(2): 183-188.

別表．帯広農高カシワ天然林のトビムシと個体数

調査日：2016.10.15.　　土壌サンプル採集者・抽出者：大西 純

No.	学　名	和　名　　サンプルNo.	前列サンプル ①	②	③	④	後列サンプル ⑤	⑥	⑦	⑧	合計	順
	Hypogastruridae	**ムラサキトビムシ科**										
1	*Ceratophysella denisana* Yosii, 1956	カッショクヒメトビムシ	3	3	1	7	11	4	25	9	**63**	④
2	*Ceratophysella wrayia* Uchida et Tamura, 1968	コオニムラサキトビムシ	3	2		3	6		20	7	**41**	⑥
	Onychiuridae	**シロトビムシ科**										
3	*Hymenaphorura* spp.	アラツブシロトビムシ属複合種					4				**4**	
4	*Protaphorura nutak* (Yosii, 1972)	ポロシリシロトビムシ				1			5	2	**8**	
5	*Protaphorura octopunctatus* (Tullberg, 1876)	ヤツメシロトビムシ	2	2	6	14	9	9	22	6	**70**	③
6	*Protaphorura* cf. *yagii* Kinoshita, 1923	ヤギシロトビムシに酷似種			1						**1**	
7	*Protaphorura yodai* Yosii, 1966	ヨダシロトビムシ			1						**1**	
8	Onychiurinae sp.	シロトビムシ亜科の一種		3	1	1			12	6	**23**	
9	*Mesaphorura* sp.	イトシロトビムシ属の一種		2				2	2	1	**7**	
	Brachystomellidae	**サメハダトビムシ科**										
10	*Superodontella distincta* (Yosii, 1954)	ツノナガヒシガタトビムシ						1			**1**	
	Neanuridae	**イボトビムシ科**										
	Pseudachorutinae	**ヤマトビムシ亜科**										
11	*Friesea (Friesea) japonica* Yosii, 1954	ヤマトシリトゲトビムシ	1							1	**2**	
12	*Friesea (Friesea)* sp.	シリトゲトビムシ亜属の一種		2	1	1	10	1	1	7	**23**	
13	*Micranurida japonica* Tamura, 1998	ニッポンチビヤマトビムシ				3					**3**	
14	Pseudachorutinae sp.	ヤマトビムシ亜科の一種				2					**2**	
	Neanurinae	**イボトビムシ亜科**										
15	Neanurinae sp.	イボトビムシ亜科の一種		1	2	9			1	1	**14**	
	Isotomidae	**ツチトビムシ科**										
16	*Folsomia ozeana* Yosii, 1954	オゼフォルソムトビムシ					1		33		**34**	
17	*Folsomia* sp.	フォルソムトビムシ属の一種								3	**3**	
18	*Isotomiella japonica* Tanaka et Niijima, 2009	ヤマトメナシツチトビムシ								1	**1**	
19	*Pteronychella spatiosa* Uchida et Tamura, 1968	コサヤツメトビムシ			1	306			43	402	**752**	①
20	*Isotomurus* sp.	カザリゲツチトビムシ属の一種				1					**1**	
21	*Desoria dichaeta* (Yosii, 1969)	ハイイロツチトビムシ	3		10	28	13	14	11	37	**116**	②
22	*Desoria notabilis* (Schäffer, 1896)	アオジロツチトビムシ					3				**3**	
23	*Desoria sensibilis* (Tullberg, 1872)	マキゲトビムシ								1	**1**	
24	Isotomidae sp.	ツチトビムシ科の一種	1		1						**2**	
	Tomoceridae	**トゲトビムシ科**										
25	*Tomocerus (Tomocerus) jesonicus* Yosii, 1967	エゾトゲトビムシ								1	**1**	
26	*Tomocerus (Tomocerus) kinoshitai* Yosii, 1946	キノシタトゲトビムシ				1					**1**	
27	*Tomocerus (Tomocerus)* sp.	トゲトビムシ亜属の一種				1					**1**	
	Entomobryidae	**アヤトビムシ科**										
28	*Sinella (Sinella) umesaoi* Yosii, 1940	ウメサオカギヅメトビムシ			5				3	1	**9**	
29	*Sinella* sp.	カギヅメアヤトビムシ属の一種			3						**3**	
30	*Entomobrya* cf. *japonica* Uchida, 1954	シマツノトビムシに酷似種				17			5	25	**47**	⑤
31	*Lepidocyrtus (Lepidocyrtus)* cf. *lignorum* (Fabricius, 1775)	シロハゴロモトビムシに酷似種			1				2		**3**	
32	Entomobryidae sp.	アヤトビムシ科の一種		4	1					1	**6**	
	Neelidae	**ミジントビムシ科**										
33	*Megalothorax minimus* Willem, 1900	ケントビムシ	1	2		4	1	1	1	5	**15**	
34	*Neelides minutus* (Folsom, 1901)	ミジントビムシ			1	12		1		1	**15**	
	katiannidea	**ヒメマルトビムシ科**										
35	*Sminthurinus* sp.	ヒメマルトビムシ属の一種	5	6			11				**22**	
	Sminthuridae	**マルトビムシ科**										
36	*Sphyrotheca multifasciata* (Reuter, 1878)	オニマルトビムシ				1		3	1		**5**	
	Dicyrtomidae	**クモマルトビムシ科**										
37	Dicyrtominae sp.	クモマルトビムシ亜科の一種			1						**1**	
38	*Ptenothrix corynophora* Börner, 1909	セグロマルトビムシ	1								**1**	
39	*Ptenothrix* sp.	ニシキトビムシ属の一種	1				1	1	3	4	**10**	
		個体数	**21**	**27**	**37**	**412**	**70**	**37**	**190**	**522**	**1316**	
		種類数	*10*	*10*	*16*	*18*	*11*	*10*	*17*	*21*	***39***	

2019.8.10.作成

活平神社に関する一考察

持田 誠[1)]

Makoto MOCHIDA, 2020. A Study on the Katsuira Shrine in Urahoro, Tokachi region, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 15-19.

はじめに

上浦幌地区の南部に位置する活平地区には、活平神社がある（図１）。活平神社の創建については、資料により1904（明治37）年と1908（明治41）年の２説がみられ、現在もその由緒は確定していない。

そこで、現在把握できている活平神社に関する記述資料を並べ、活平神社の創建年について、考察した。

町村史の記述の変遷

『浦幌町百年史』（浦幌町百年史編さん委員会 1999）には、活平神社について、次のような記述がある。

活平八幡神社

明治三七年朝日浅吉が鷲見農場の管理人となった際に、入殖者たちと設置した。

祭神　八幡神・天照皇大神

祭礼　春秋　四月十五日　九月十五日

『浦幌町百年史』

『浦幌町史』（浦幌町史編さん委員会 1971）には、設立の年について記述は無い。また、祭神として八幡神への言及が無い。

祭神は天照皇大神、朝日農場に入殖と同時に、敬神の心厚き同志が相諮って神社を建立したという。維持管理は氏子全員で、祭礼は、春秋二回行なっているが、四月十五日と九月十五日がそれである。

『浦幌町史』

『浦幌村五十年沿革史』（浦幌村教育協会 1949）は、「活平部落誌」の項で活平神社へ言及し、以下のような記述がある。

活平神社は明治四十一（1908）年建立八幡神を祭神として毎年四月十日及九月十五日祭典を執り行つている。

『浦幌村五十年沿革史』

図1　活平神社の鳥居。神明鳥居と呼ばれる型のひとつで、浦幌町内でもっとも多くみられる。2016年8月撮影

このように、活平神社の創建時期については、各町史の間で微妙に記述が食い違っている。『浦幌村五十年沿革史』の記述する1908（明治41）年という年は、６月に上浦幌駅逓所が解説された年にあたるが、このとき駅逓の管理人となったのが、活平神社の初代総代（図２）となる、朝日浅吉（図３）であった。

朝日は、1904（明治37）年に中川北松から、三分割された熊谷農場のうち、鷲見邦司所有地（鷲見農場）の管理人を引き受けている。『浦幌町史』に記述の「朝日農場」とは、管理人を引き受けた鷲見農場のことを指しているものと思われることから、『浦幌町史』も1904（明治37）年の立場に立つものと考えられる。

つまり、『浦幌町百年史』と『浦幌町史』は、朝日が鷲見農場の管理人となった年を、『浦幌村五十年沿革史』は、朝日が上浦幌駅逓所の管理人となった年を、それぞれ創建の年として記述しているのである。

『朝日家三代記』の記述

活平神社と関係の深い朝日家についての資料として、『朝日家三代記』（田所 1978）がある。朝日家は、1897（明治30）年に福井県から浦幌太（現在の朝日地区）へ、朝日又兵衛と妻ミナ、当時16歳だった息

1) 浦幌町立博物館　〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町16

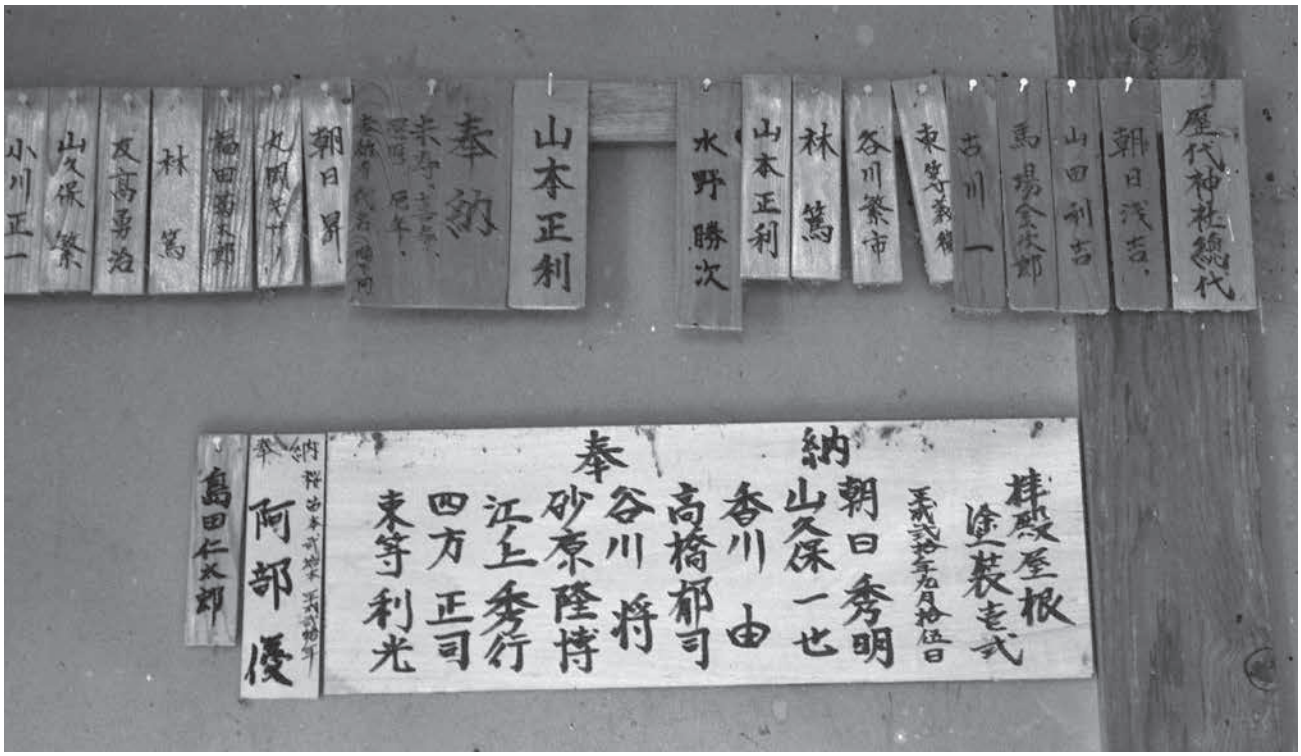


図2　活平神社拝殿内に掲げられた、歴代神社総代の氏名が書かれた木札や、奉納者の氏名を記した木札。「歴代神社総代」の筆頭に朝日浅吉の名があるほか、『活平の歩み』を記した水野勝次の名もあることがわかる。また、奉納者名の木札には、「丸岡キサノ」「林篤」の名がみえる。2017年11月21日撮影

図3　朝日浅吉

子の浅吉らで入地した。

浅吉が21歳となった1903（明治36）年３月16日に、小川長四郎・すみの長女とめと結婚しているが、この婚姻届は「十勝郡生剛村字下浦幌番外地」となっている。実際の場所は円山地区の浦幌川左岸で、円山の南方１km地点とされる。ここで1904（明治37）年11月25日に、長男である昇が出生している。したがって、朝日浅吉は、1904（明治37）年には円山に居住していることがわかる。

1904（明治37）年５月に熊谷農場が熊谷泰造、鷲見邦司、橋本順三の三氏に分割され、「鷲見氏の持分は下川流布から活平口に至る耕地、好適地を含めて約三百町歩で、管理は朝日浅吉があたった」（『朝日家三代記』）とされる。つまり、このとき朝日浅吉は、円山に居住しつつ、活平以北の鷲見農場を管理していたことになる。

1905（明治38）年に、活平駅逓所（上浦幌駅逓所）が設けられることになり、守谷晋氏が管理にあたることになったのが、管理人が中川北松氏に代わった。この赤川氏の推薦で朝日浅吉が「円山から移住して牧場管理と共に駅逓所を明治四一年六月開設した」とされる（『朝日家三代記』）。

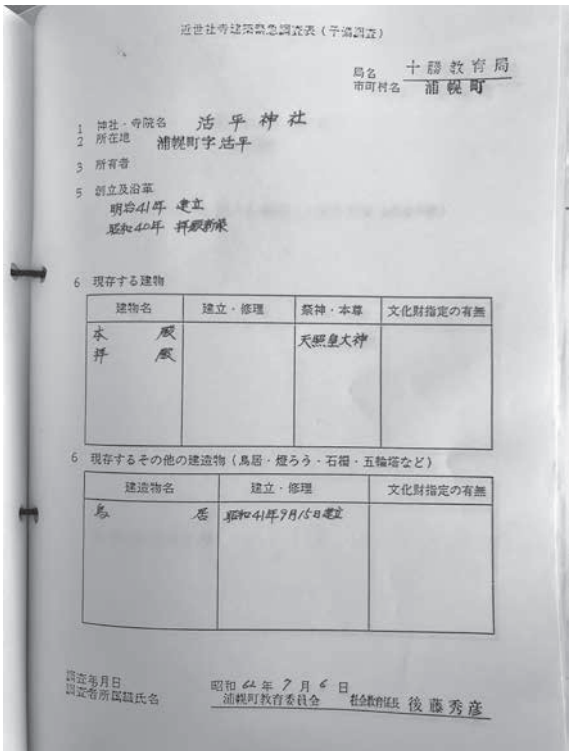
つまり、それまで円山に居住しながら、上浦幌地区の鷲見農場の管理をしていた朝日浅吉は、上浦幌駅逓所の設置にともなって、1908（明治41）年に活平へ移住し、名実ともに地域の住人となったことになる。

『朝日家三代記』での活平神社についての記述は以下とおりである。

活平神社は明治四十一年建立、八幡神を祭神としている。土地は朝日家によって寄付され、部落一同によって社殿、鳥居等設立され毎年四月十日及九月十五日祭典が行なわれている。

『朝日家三代記』

『朝日家三代記』の記述は、土地の寄付、社殿・鳥居の建立の部分を除くと、『浦幌村五十年沿革史』の記述を、そのままなぞっているようにみえる。はっきりしたことは言えないが、『朝日家三代記』は、活平神社の創建年については、独自の判断をしていないように思える。


近世社寺建築緊急調査表（予備調査）

局名 十勝教育局
市町村名 浦幌町

1 神社・寺院名 活平神社
2 所在地 浦幌町字活平
3 所有者
5 創立及沿革
明治41年 建立
昭和40年 拝殿新築

6 現存する建物

建物名	建立・修理	祭神・本尊	文化財指定の有無
本殿		天照皇大神	
拝殿			

6 現存するその他の建造物（鳥居・燈ろう・石祠・五輪塔など）

建造物名	建立・修理	文化財指定の有無
鳥居	昭和41年9月15日建立	

調査年月日
調査者所属職氏名
昭和44年7月6日
浦幌町教育委員会　社会教育係長 後藤秀彦

図4　1987年に北海道教育委員会が実施した「北海道近世社寺建築緊急調査」における調査票の活平神社の項
（浦幌町立博物館所蔵）

図5　活平神社拝殿内に掲げられた、1966（昭和41）年の拝殿新築寄付者名簿。2017年11月21日撮影

図6　活平神社拝殿内に掲げられた、2007（平成19）年の拝殿修復工事の参加者名簿。2017年11月21日撮影

『活平の歩み』と『近世社寺調査』

これら以外の資料としては、下記のものがある。

活平神社の総代を務めた水野活次は、私家版の部落史にあたる『活平の歩み』（水野 1989）を著し、以下のように記述している。

朝日家は、浦幌太（現朝日）に入地し、明治36年円山に移住したが上浦幌に駅逓所の経営のため一家あげて41年、活平の現在地に入植したのであるが、鷲見農場の管理と上浦幌駅逓所を受継ぐため浅吉氏は、38年頃より活平にしばしば来ていたのである。

活平神社は明治治41年八幡宮を祭神として建立される。大工は大野佐六によって拝殿鳥居が造営された。現在地より少し下手の林さんの畑と神社の森との境位である。

現在の新しい拝殿は、昭和41年４月15日本別の中前建設によって建立され、拝殿内に掲示されている寄付の木札は地域の歴史を教えるものである。木札の字は林供養丸氏が書いたものである。林供養丸氏は昔の師範出の僧侶であり、十勝に来た時は十勝支庁より書記官にとの話もあったが、断って川流布に入植、現在地に移住された珍しい経歴を持つ人である。

『活平の歩み』

ここでも、朝日浅吉が活平へ居住したのは1908（明治41）年で、それ以前は農場の管理や駅逓所の開設準備のため、円山からときどき訪れていたことが記されている。これは、活平神社の起こりを考える上で重要な視点と思われる。

浦幌町郷土博物館（現、町立博物館の前身）の後藤秀彦は、1987（昭和62）年に北海道教育委員会が実施した「北海道近世社寺建築緊急調査」に参画し、町内の全神社について、沿革や現存構造物について調査している。この報告が、『浦幌町郷土博物館報告』に一覧として掲載されている（後藤 1990）。ここでの活平神社の創建は、1908（明治41）年としている。

念のため、北海道近世社寺建築緊急調査の調査票原本（「近世社寺建築緊急調査表（予備調査）」、図4）も確認したところ、「明治41年建立」と記されていた。ただし、その出典は明記されていなかった。

後藤（1990）は、『朝日家三代記』や『浦幌村五十年沿革史』、『活平の歩み』を参照しているのではないかと推察されるが、調査票原本の記述をみると、祭神が八幡神ではなく天照皇大神と記されており、この点が上記の文献と異なる。

考　　察

活平神社拝殿に残る歴代の総代名を記した木札（図２）から検討しても、同社の初代総代が朝日浅吉であ

図7　活平神社拝殿内に掲げられた、林篤奉納の虎の刺繍絵。
2017年11月21日撮影

ることは明らかである。しかし、各資料を比較検証したところ、1904（明治37）年には、朝日はまだ活平に住んではいないようである。この点で「明治37年創建説」は、神社所在地域にまだ居住していない者を、氏子総代とすることがあるだろうか、という観点から疑問が残る。

この点を考慮したうえで、以下のような仮説も考えられる。浦幌の各集落の神社の起こりをみていくと、例えば上厚内神社のように、もともとは地域の入植者などが農耕神である八幡神を祀る小祠を建て、のちに氏子組織を整えていわゆる「神社」の形態をとるにあたり、天照皇大神を祀るようになったケースがみられる。後藤（1990）も、町内の神社について「圧倒的に多いのは八幡神社と稲荷神社で、八幡神社は上浦幌方面を中心として万年・養老・静内にも及び」と報告しており、多くの神社の原初形態が八幡神であることをうかがわせる。

これらの事例から考えると、朝日浅吉がまだ活平へ居住していなかった1904（明治37）年に、敬神者有志が八幡神を祀る小祠を建てて神社の原初形態をつくり、これを母体として、1908（明治41）年の朝日の活平移住にともない、「活平神社」として、正式な神社の形態を整えたという見方もできるのではないだろうか。

図8　活平神社拝殿内に保存されている軍配
2017年11月21日撮影

活平神社に残る絵馬など

活平神社拝殿には、多くの刺繍による奉納物が残されている。まず目を引くのは、『活平の歩み』（水野1989）が「地域の歴史を教えるもの」と記している、拝殿修復などに際しての寄付者の名簿（図５、図６）である。

同書によると、活平神社では1966（昭和41）年に、中前建設の手により新たな拝殿を造営したとされる。「林供養丸による寄附の木札が」は図５がそれに該当すると思われるが、枠木は新しいもののようである。後世に修復されたものか、今後検証が必要である。

また、現在の拝殿は2007（平成19）年に修復されており、拝殿内にこのとき修復に参加した者の名簿が掲出されている（図６）。

そのほかに目を引くものとして、1921（大正10）年丸岡キサノ奉納の絵馬、1938（昭和13）年林篤奉納の虎の絵（図７）がある。いずれも刺繍で描かれているという特徴がある。丸岡キサノの絵馬については、別に調査を実施している（持田 2020）。

また、変わったものでは軍配が保存されている（図７）。

このように、活平神社については記述資料が多く、拝殿内にもさまざまな資料が現存している。各集落の神社史については、多くについて史料が現存しておらず、不明な点が多いが、活平神社については、これらを詳細に調査・分析することで、不明点が明確になる可能性がまだあると考えられる。

引き続き調査を進め、創建年や祭神の変遷を含め、神社史の詳細を明らかに、後世のために記録化することが今後の課題である。

謝　辞

活平神社の調査にあたり、浦幌神社宮司の背古宗敬氏、活平神社管理者の阿部優氏、博物館実習生（帯広畜産大学大学生、当時）の元木咲氏に協力いただいた。『活平の歩み』の調査にあたり、帯広百年記念館所蔵の「井上壽資料」を使用し、同館の大和田努学芸員に協力いただいた。皆様に深謝したい。

引用文献

後藤秀彦，浦幌町の神社．浦幌町郷土博物館報告35: 478-484.
水野勝次，1989．活平の歩み．自費出版.
持田誠, 2020. 活平神社に残る丸岡キサノ奉納の絵馬. 浦幌町立博物館紀要, 20: 21-29.
田所武，1978．朝日家三代記．柏李庵書房，帯広．302pp.
浦幌町史編さん委員会, 1971．浦幌町史．浦幌町役場，浦幌．922pp.
浦幌町百年史編さん委員会，1999．浦幌町百年史．浦幌町役場，浦幌．823pp.
浦幌村社會教育協會，1949．浦幌村五十年沿革史．浦幌村役場，浦幌．424pp.

活平神社に残る丸岡キサノ奉納の絵馬

持田 誠[1)]

Makoto MOCHIDA, 2020. The Ema Tablet dedicated by Kisano MARUOKA at Katsuhira Shrine in Urahoro, Tokachi region, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 21-29.

図1　活平神社拝殿に掲げられている、丸岡キサノ奉納の絵馬

はじめに

浦幌町字活平に所在する活平神社には、1921（大正10）年９月に奉納された絵馬が存在する（図１）。現在、浦幌町内に残っている社寺所有の絵馬のなかでは、博物館で把握している限り、厚内神社に残る1909（明治42）年奉納の絵馬（持田 2019）に次いで古いものである。

この絵馬には、奉納者として「廣島県人　丸岡キサノ」の名前がみられる。また、一般的な絵馬が板に絵で馬を描くのに対し、この絵馬は刺繍によって製作されているという、大きな特徴がある。

しかし、『浦幌町史』などの公刊資料には、丸岡キサノに関する記述は無く、またこの絵馬についても言及されている資料は見当たらない。

そこで博物館では、丸岡キサノの孫にあたり、丸岡家の歴史について独自に調査を実施してきた丸岡繁喜氏（現在は北広島市に在住）から聞き取りを行なった。次に、丸岡家に残る写真や家系図、キサノと、キサノの長男である栄三氏の手記などを実見し、町史や部落史などの関連資料と照合しながら内容を検討した。

本報では、これらの調査をもとに、丸岡キサノとはどういった人物なのか、なぜこの絵馬が奉納されたのか、などの資料情報の収集と、地域における絵馬の地方史的な意義について検討した。

1) 浦幌町立博物館　〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町16

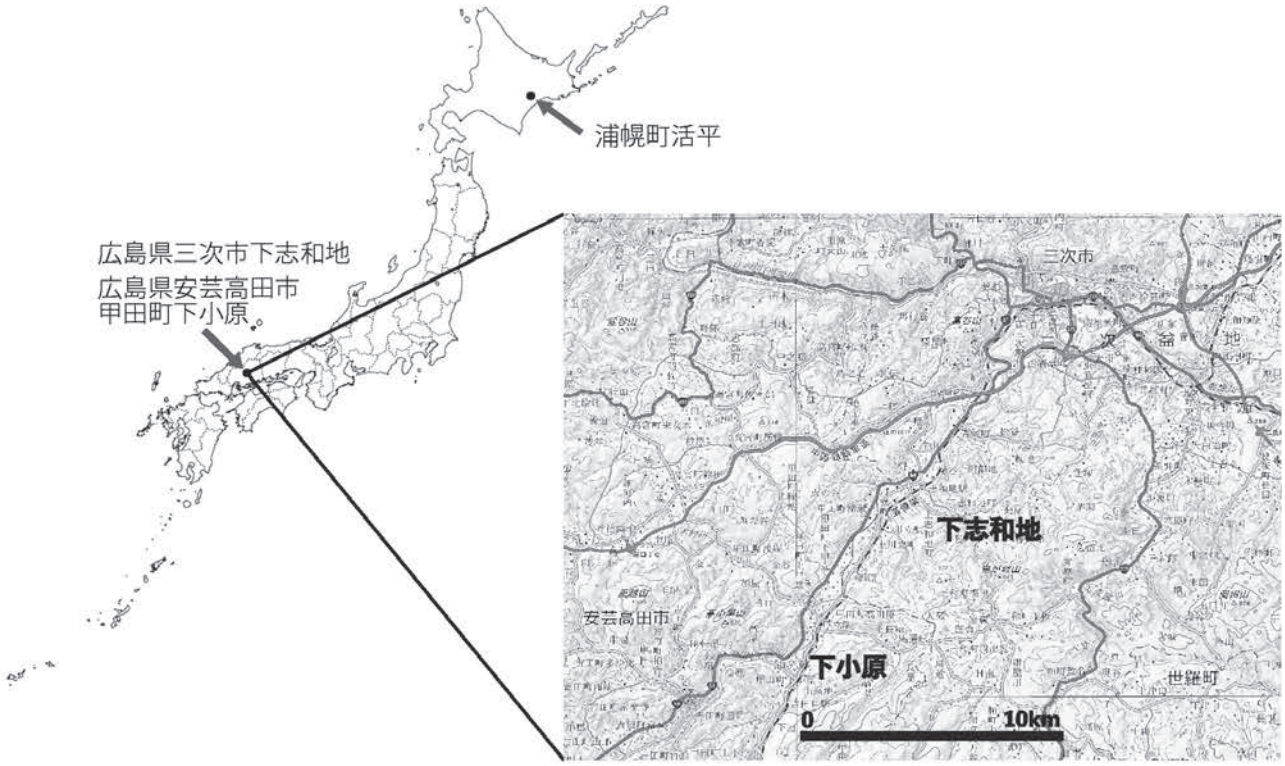


図2　丸岡キサノの生家の所在した広島県三次郡川地村下志和地（現、三次市下志和地町）と、丸岡三一の生家のある広島県高田郡小田村大字下小原（現、安芸高田市河田町下小原）の位置。安芸高田市方向から三次盆地（地図では三次市）方面へ流れる江の川の流域で、川に沿ってJR西日本の芸備線が通じている。下志和地と下小原は隣接している地域であることがわかる。国土地理院1:200,000地形図「広島」「浜田」より作製

絵馬の概要

2017（平成29）年11月21日に、浦幌神社宮司の背古宗敬氏の立ち会いのもと、活平神社へ出向き、絵馬について現地調査を実施した。

丸岡キサノの絵馬は、ガラス入り額縁に額装された状態で、活平神社拝殿内に掲出されている。このため、拝殿に立ち入れば誰でも観覧することができるが、現在、拝殿自体が通常は施錠されている。

大きさはタテ38.6cm、ヨコ49.2cmで、絵馬本体の厚さは約1.9cmである。素材は、木製の板の上に、馬の絵の刺繍があしらわれているものである。

刺繍の上に「奉納」「大正拾年九月　廣島県人　丸岡キサノ」の文字が書かれており、この絵馬の奉納者と奉納年月を伝えている。

なお、活平神社内には、1938（昭和13）年林篤奉納の虎の絵があるが、これも刺繍でつくられている。刺繍による絵馬、奉納絵は、浦幌町内の他の神社ではみられず、活平神社に特徴的なものである。

調査にあたり、壁から絵馬をおろして状態を点検したが、額装の背面などにはいっさい書き込みなどはみられなかった。

丸岡繁喜氏からの聞き取り

丸岡繁喜氏は、現在、北広島市に居住。中前建設株式会社浦幌出張所の所長を務めている。なお、後述するように、この中前建設（本社：本別町）も、丸岡家と関係の深い建設会社である。

丸岡繁喜氏は丸岡キサノの孫にあたる。かつて北海道浦幌高等学校（2010年に廃校）で郷土史研究部に所属していた丸岡氏は、丸岡家の歴史について精力的に資料を収集し、独自に調査を続けられている。

博物館では、丸岡氏に来館していただき、丸岡キサノに関する話を中心に、聞き取りを実施した。

【実施日】2019（令和元）年５月10日
【場　所】浦幌町立博物館学芸員室
【方　法】丸岡繁喜氏が来館、持田誠学芸員が聞き取り
【概　要】
（１）丸岡キサノについて
学芸員　丸岡キサノを存知ているか？
丸岡氏　知っている。幼い頃に世話になった。
学芸員　キサノとのご関係は？
丸岡氏　孫にあたる。

図3　山田キサノ（丸岡キサノ）。17歳のとき大阪で撮影した写真とされ、年齢から1912（大正元）年の撮影と推察される。丸岡繁喜氏所蔵

図4　丸岡三一。「明治四十三年四月　二十一歳ノ時」と裏書きがある。1910年に安芸吉田の明治館で撮影したもの。丸岡繁喜氏所蔵

学芸員　丸岡キサノの生年月日と没年月日、現在の墓所はどこか？

丸岡氏　現在の墓所は浦幌町の浄福寺にある。生年月日・没年月日は後日確認して連絡する。

学芸員　旧制を山田キサノというらしいが、この山田家も広島県なのか？

丸岡氏　そのとおり。丸岡家と山田家は近い〔図2参照〕

学芸員　丸岡キサノ本人が浦幌へ来た時期、理由は？

丸岡氏　大正５-６年頃ではないか。大正６（1917）年に夫である丸岡三一の父である助太郎が亡くなっており、その頃と思う　→　〔調査により大正７年であることが判明した〕

学芸員　どこにお住まいだったのか？

丸岡氏　最初に入ったのが浦幌町活平。その後、留真に住み、さらに浦幌市街（宝町・スポーツセンター付近）へ移った。

学芸員　絵馬には「廣島県人」とあるが、広島県から北広島市へ入殖したのか？

丸岡氏　違う。自分はいま北広島市に住んでいるが、キサノと北広島市は関係が無い。山田キサノは広島県で結婚して丸岡となり、夫と共に浦幌町活平へ入殖した。

学芸員　入植は団体入殖か？

丸岡氏　団体入殖ではなく、丸岡家もほかもバラバラに広島から入っている。最初に荒川時造が1906（明治39）年に活平に入っており、その後、丸岡三一・キサノ夫妻が、荒川を頼って入ったという。広島県では百姓をしていたが、次男三男などの分家は、土地も狭くて儲からなかった。三一は大工の腕前があったので、北海道へ渡って商売しようと思って来たのではないか。そのとき、荒川が世話をした。また、いまの中前建設（本別町）の中前も広島県出身で、これは丸岡を頼って来たらしい。また、浄福寺の２代目も広島県人。こうした広島県出身者がお互いを頼りながら、時間差で浦幌に入った。みな、その後も繋がり合っている。

（２）活平神社・絵馬について

学芸員　活平神社に丸岡キサノが1921（大正10）年９月に奉納した絵馬があるのを知っているか？

丸岡氏　写真でみたことがあるが、実物はみたことがない。

学芸員　活平神社との関わりは？

丸岡氏　よくわからないが、夫の丸岡三一は大工で、

図5　結婚後の丸岡キサノ（左）と三一（右）。前列の子供は左が長男の栄三氏（1928・昭和３年生）、右が長女の文子氏（1927・昭和２年生）のため、昭和初期の撮影と思われる。丸岡繁喜氏所蔵

活平や留真の橋（木橋）を作ったり、家を作ったりしていた。浄福寺の以前の建物も三一が作った。馬頭観音の建物も作った。なので、神社の関係でもなにか作ったりしていたのではないか？当時、活平地区には大工がいなかったので、なんでもやっていたらしい。

学芸員　絵馬奉納の理由やきっかけはなにかあるのか？

丸岡氏　上記のような理由だと思うが、よくわからない。

学芸員　絵馬は、なぜ刺繍なのか？

丸岡氏　わからないが、器用な人で刺繍が得意だったのは覚えている。飾り物のぼんぼりを縫ったりしていた。また、刺繍は山田の親戚（キサノのお祖母さん）から習ったのだと、話していたのを聞いたことがある。

（３）丸岡三一について

学芸員　キサノの夫である三一は、丸岡家の資料によれば、上浦幌で「大工の左甚五郎」といわれた技術を持つ名工とされているが、その記録はなにかあるか？

丸岡氏　文書での記録は無く、地域で伝えられてきた。ただ、実際に作った建物がいまも残っており、美園の旧大柿さんの家がそうだという。いまは誰のものになっているのかわからないが廃屋。牛車の屋根が独特の腰折れ屋根をしている。昭和三十年代までは、知人だった大柿さんが使っていた。今も中に棟札があると思うので、いちど確認したいと思っていた。

図6　前列左端がキサノ、後列左端が三一。三一の右隣の男性は、丸岡家本家の人物（三一の兄？）と思われることから、広島時代の大正期に撮影したと思われるが、詳細不明。丸岡繁喜氏所蔵

丸岡氏　丸岡三一の父は助太郎といい、三一は次男。祖父は与助という。与助の妻ユウは、旧姓を山田という。キサノはこの山田家の出身。広島時代に丸岡へ嫁いで、三一と結婚した。

丸岡氏　丸岡家はもともと江戸時代は丸山家といった。のちになんらかの理由で丸岡になった。むかしは、苗字が同じだとすぐに兵隊にとられるとかあったので、兄弟でも苗字を変えることがあった。その影響らしい。

（４）丸岡キサノの人物像について

学芸員　丸岡キサノはどのような人物だった？

丸岡氏　やさしい人だった。怒ったり大声を出しているのを聞いたことが無い。外孫にも同じように良くしてくれていて、常に子供達に囲まれていた。未だに従姉妹が集まったりするのもその影響だろう。集まると、よくキサノさんに連れられて遊びに行ったという話になるので。
三次の武士の出だということで、母親などは、背筋を伸ばさないなど姿勢が悪いと注意されたという。武士の出として、躾けには厳しかったのかも知れない。

学芸員　絵馬に「廣島県人」と書いているところを見ると、広島県出身に誇りを持っていたように感じるが。

丸岡氏　そうだと思う。聞いたところによると、そもそもは、いずれ広島へ帰ろうという思いがあったらしい。だが、子供達が増えてくると、こちらにいる必然性が出来て、結局帰ることは無かった。広島県に対する思いはあったのだろう。

図7　1925（大正14）年の浦幌第六橋」掛け替え工事における丸岡組の写真。人物は、前列右から太田、丸岡三一、竹当、高松、後列右から上村、杉江、井上と記載がある。なお、後列左端の井上という人物は、丸岡キサノの従兄弟にあたるという。
丸岡繁喜氏所蔵

丸岡キサノのおいたち

丸岡キサノ（旧姓：山田キサノ：図３ほか）は、1895（明治28）年に広島県三次郡川地村字下志和地で、長女として出生[註1)]した。三次郡川地村字下志和地は、現在の三次市下志和地町[註2)]にあたる。

山田家のあった下志和地は、中国地方の中心部にあたる三次盆地の南西部、江の川の上流域に位置する（図2）。JR西日本芸備線の志和地駅の南東側に、江の川の支流である板木川に沿って、標高300m前後の低い丘陵状の山地が連なっている、山間集落である。キサノはここで育ち、尋常小学校の高等科を卒業した[註3)]。

キサノは、1915（大正4）年に、丸岡三一（図4ほか）と結婚する。三一の丸岡家は、広島県高田郡小田村大字下小原、現在の安芸高田市甲田町下小原にあたる[註4)]。

甲田町下小原は、キサノの生家のあった下志和地を通る芸備線で３駅目の吉田口駅一帯で、江の川をさらに上流へ向かった位置にある。いわば隣接地域である。

三一は、父助太郎、母マサの次男として生まれた。なお、聞き取りで丸岡繁喜氏も語っているが、助太郎の母ユウ（三一の祖母）の旧姓は山田で、これはキサノの生家である山田家の家系にあたる。

1917（大正6）年に、三一の父、丸岡助太郎が亡くなる。これが節目になったのであろう、三一とキサノは、翌1918（大正7）年に北海道へ渡り、十勝郡浦幌村字活平へ入った。生没年から算出すると、三一が28歳、キサノが23歳の頃ということになる。広島から浦幌への行程についての記録はみつかっていない。

名大工だった丸岡三一

当時、活平には荒川時蔵・フユ夫妻が入っていた。荒川時蔵が活平へ入ったのは1906（明治38）年[註5)]で、丸岡三一とキサノは、荒川を頼って浦幌へ来たという。

丸岡三一の母マサは、広島県高田郡美土里町横田の、菊池〔きくいけ〕豊之助の家系である。荒川家は、この菊池家の分家にあたり、同じ広島からの入殖者を熱心に世話していたとされる。三一が荒川を頼って浦幌入りしたのは自然なことで、家も隣接地に設けている[註6)]。

三一とキサノが北海道へ来た理由ははっきりしていないが、丸岡繁喜氏によれば、もともと広島での丸岡家の土地は山間で狭く、なかでも次男では与えられる土地はさらに少なかった。三一はこうした状況下での将来を見越して、もともと得意だった大工の腕を北海道で活かそうとしたのではないか？と語っている。

三一・キサノ夫妻が浦幌へ来たころ、活平地区には大工がいなかった。三一は1921（大正10）年に建設会社の丸岡組（丸岡建設）を興して初代棟梁となる。丸岡建設には、1925（大正14）年に瀬多来地区に架橋した浦幌第六橋掛け替え工事における記念写真が残されている（図７）。

丸岡繁喜氏の父（三一の長男）である丸岡栄三氏（図５,８.10に写真）の手記が残されている[註6)]。これによれば、留真炭鉱（浦幌炭鉱の留真坑か？）の開坑で、三一は「炭住その他の建物を一手引受施工していた」とされる[註7)]。

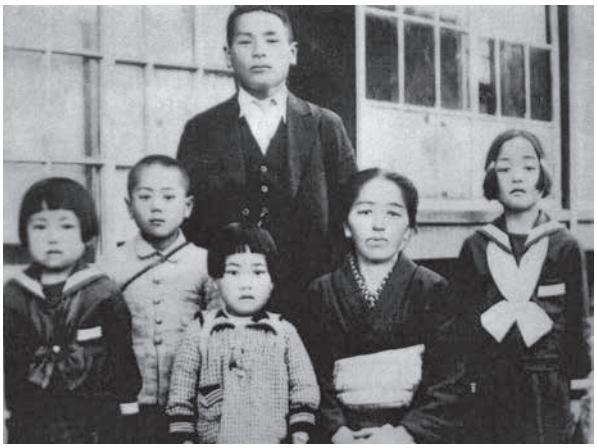


図8　留真時代の住宅前での写真。1935（昭和10）年前後の撮影。後列の男性が丸岡三一。前列左から次女の澄江、長男の栄三、三女のたづ子、キサノ、長女の文子（敬称略）。
丸岡繁喜氏所蔵

図9（左上）　丸岡三一が1947（昭和22）年に建築した浦幌町字宝町に建てた家。
1952（昭和27）年５月17日撮影。丸岡繁喜氏所蔵

図10（左）　丸岡三一が宝町に建てた家の前での集合写真。左からキサノ、三女のタヅ子、三一、次女の澄江、長女の文子、長男の栄三（敬称略）。丸岡繁喜氏所蔵

水野（1989）は、活平神社の参道入り口に立つ馬頭観音について「活平の小堂字は丸岡大工の寄進されたものであり、毎年４月９日の祭りに併せ、牛馬の安全と発展を祈り参拝している」と記している。

丸岡繁喜氏によれば、このように、大工として手広く活躍していた三一のことを、上浦幌地区の人々は「大工の左甚五郎」と呼んだという。

三一とキサノは、ほどなく活平から留真へ（図8）、さらに戦後は市街地の宝町へと移転している。

丸岡栄三氏の手記[註6)]には次の記述がある。

> 生れた所は浦幌町字留真（字瀬多来地区の入口近く）の山田正さん宅の隣地　親達は活平の荒川幸治宅向いより住宅を新築し引越して住いこの家にて四人兄姉が生まれたのです。

栄三氏は、1928（昭和３）年４月26日に留真で生まれており、正確な年月ははっきりしないが、大正末期から昭和初期にかけて、活平から留真へ移住していることになる。なお、その後、水害によりさらに留真地区の別の場所へ移住したとも記されている。

1948（昭和23）年12月には、留真から市街地の宝町へ住宅を新築して移転（図９、図10）。これが、三一・キサノの終の住処となった。

浦幌における広島県人の入殖

水野（1989）は「大正はじめ頃まで、活平に多数入殖されている広島県人によって、広島の神楽が奉納され、当部落や近隣の人々の楽しみであった」と記している。

また、本別の「中前建設」が、1966（昭和41）年４月15日、活平神社拝殿の新築を担当したとの記述もある。この中前建設とは、現在本別町に本社を置く会社で、創業者を中前数一といい、やはり広島県の出身である。『活平小学校閉校記念誌かつひら』（事業部記念誌係1976）に、活平小学校の第30回卒業生として、中前数一自身が次のように思い出を書き記している。

> 私の出生地は広島県ですが、五才にして両親と死別し、六才の折姉とともに広島市を後にし佐古田の叔父を頼ってこの草深い活平の地に参りましたが、広島県〔ママ〕丸出しの私たちに友達は異様な感を持ったようでした。

また、丸岡栄三氏[註6)]も手記に以下のように記す。

> 活平の佐古田さん宅に同居していた中前数一さんが父三一の大工の見習いとして丸岡宅に同居し一緒に勤め歩いていたが、二十才で徴兵･･･〔以下略〕」

中前氏は、終戦後に、栄三氏の妹（三一・キサノの二女）と結婚して本別へ中前建設を興し、以後、同社は活平神社の改築など、地区の振興に助力すると共に、浦幌町宝町に浦幌事業所を設置。丸岡繁喜氏を所長として、今日に続いている。

1972（昭和47）年12月23日に、留真を会場に開催されたシンポジウム「中浦幌駅逓所と中川北松」の報告が、『浦幌町郷土博物館報告』に６回に渡り連載されている[註8)]。このなかで、中川北松[註9)]の長男政雄氏、長女シズ氏と、当時北海道池田高等学校の教諭で池田町史編さん室員だった山崎徹氏とが、次のようなやりとりをしている（博物館報告編集局 1975）。

中川正雄　活平へ広島団体が入いった。
中川シズ　朝日農場[註10)]も広島だったわね。
山崎　徹　理由がありまして、徳島と広島。あの辺の農家は藍を作っていたんです。その藍の栽培が特に日露戦争の後になってから染料が輸入されまして、所謂る日本独自の藍という植物染料がダメになったんです。そういうことで、藍作物を田に転換できないものだから誘いによって、すぐ北海道に来た方が広島・徳島に多いんです。ただ私、中川さんの場合にむこうでは長男の方だと聞いて、普通、家族の中で次男の方の方が多い場合もあるんです。それから明治30年代にも大洪水があって随分あの辺がひどくなったことがあります。

ここで中川正雄氏が「広島団体」と述べているが、活平の場合は団体入殖ではなく、あくまでも個人の入殖である。

活平地区には、1905（明治38）年、先述の荒川時蔵のほか、沖本五兵衛、小野仁市、正木彌作、増田次郎、廣田小市、古川玉吉が広島から来て、朝日浅吉の管理する農場へ小作として入った（浦幌町史編さん委員会 1971；水野 1989）。中川シズ氏が「朝日農場も広島」と述べているのも、このことを指している。

『浦幌町史』（浦幌町史編さん委員会 1971）には、このとき活平へ入り、1911（明治44）年に川上へ移った古川定松の回想を記録している。広島から函館を経由して釧路港へ入り、活平の朝日農場へ家族９人で入ったという。

このほかにも、丸岡繁喜氏の聞き取りにもあるように、浦幌には広島県から入った人々が随所にみられる。一見すると団体入殖にみえるが、初期に小作に入った荒川ら同郷者の先人を頼って、いずれも個別に渡って来ているものであることがわかった。

本州から、こうした同郷者を頼って北海道へ入る形態は、団体入殖とともに十勝地方のその後の開発にとって、大きな基礎となったのは間違い無いだろう。

なお、山崎徹氏が徳島や広島の藍生産の衰退と北海道入殖とを絡めて説明しているが、丸岡家と藍生産との関係は不明である。広島での藍生産は、江戸時代の博物書『和漢三才図会』にも名が出てくる古くからの産物であり、明治30年代初頭までかなりの生産量を誇っている。多くは沿岸域だが、川船を用いて安芸地方でも生産されていた。明治30年代後半には生産量も激減している。時期的にはむしろ、明治38年に活平入りしている荒川らに、なんらかの関係があるのかもしれず、詳細については今後の研究課題としたい。

丸岡キサノの絵馬奉納の背景

キサノの絵馬が奉納されたのは、浦幌へ渡って３年目となる1921（大正10）年９月である。キサノの絵馬奉納については、絵馬そのもの以外に記録は無く、奉納の理由などの詳細は不明である。

絵馬が、一般的な板に墨書きされたものではなく、刺繍によるものであることについても記録は無いが、聞き取りのなかで丸岡繁喜氏が述べているように、キサノはもともと手先が器用で、刺繍も得意だったようである。

大工の技術で商売を興そうと活気づく夫三一の隣で、不慣れな土地への進出に不安もあったことに違いなく、三一の商売の成功と、自らの生活も含む活平地区の発展と安定を願って、絵馬を奉納したのだろう。これについて、丸岡繁喜氏のもとに残る、晩年にキサノが記した手記から、キサノの篤い信仰心が垣間見られるので、以下に転載する。

皆々様にはお●で新春を向へられたの了何よりかげ乍ら私喜んで安心致しました
十二月十三日の御手紙ありがたう御座いましたすぐ返事を出すと思い乍ら今日迄のびのびして御面〔ママ〕なさいね
どーも済みませんでした　サイソクしてね
私も母さんの前があるのでね
私方でもお蔭様で皆なそろって五十二年の新春を向へましたるは神佛様のお蔭様と喜ん〔ママ〕居ります
私もシンケツー〔ママ〕が少しづゝ良く成り今朝免〔ママ〕のみ仏様へお礼するのとご飯を頂く時だけオスワリが出来る用になり其の外は今は事ム所もヒマですし私自分運動とストーフ〔ママ〕のそばイスに守りしてもらって居ります
私元よりあまり身体の丈夫でなかたのですがおじいちゃんが死亡してからなんだかがっかりしたようです
暖くなったら丈夫になると思います

今家の２番目孫か十二月二十五日帰って居り来
十五日は成人式ですから北見へ行くのです
イドーショメイ〔ママ〕*が北見へ持って行って居
るのです
貴女も体に自由分〔ママ〕気を付け　おぢいさん
の三年忌にはお参りして下さいね
では皆々様宜しくお傳へ下さい
浦幌方面は雪は今所三回しかありません
これから何ほど降か分りません

人間は神様で生れ
み仏様で育つ
人間はずか五十年
花にたとへて朝顔の
朝顔の夜にしをれる朝顔さえも
●限にすがりてしまする
心ゆくよりもろき　身をもちて
なぜにごしょーを願はや
ありがたや
お立ち向ひのみ仏様は
今日は来るか　あす来かと
お待ちばしけのみ佛様よ
行くのぢゃござらぬ　かへるでござる
あーありがたや

〔●は判読不明箇所〕

* イドーショメイ→異動証明（住民票関係）のことか？

文面から、書き記したのは1977（昭和52）年の１月と予想される。文中に「おじいちゃん」とあるのは、1975（昭和50）年に他界した三一のことと推察できる。

実際にキサノが他界するのは、この6年後の1983（昭和58）年である。しかし、この手記をみると、三一に先立たれて気落ちしている様子がうかがえ、御仏からの「お迎え」を待つ気持ちが綴られている。文面全体から、神仏への篤い信仰心が読み取れる。若い頃に絵馬を奉納したときも、同じように篤い信心からなのだろう。

絵馬に「廣島県人」と記していることについても、故郷広島に対する望郷の思いを示すもののようである。しかし、この「廣島県人」という表記は、いまやキサノの想いを越えて、歴史資料の側面がある。

『浦幌村五十年沿革史』『浦幌町史』『浦幌町百年史』（浦幌町百年史編さん委員会 1999）ともに、本町における広島からの移住についての記載は乏しい。昨今では、浦幌の開拓期の本州からの移住者は「富山、石川、岐阜など中部方面から」と語られることが多く、広島からの移住が語られることはほとんどみられない。

しかし、明治末期から活平地区に広島県からの移住者が固まっていた時期があり、朝日農場などとも関わりながら、浦幌の近代史を形成する礎をなしたという歴史について、キサノの絵馬は貴重な証言となっている。

図11　浦幌駅近くの浄福寺にある丸岡家の墓。丸岡キサノ、三一、栄三（長男）が眠る。2020年２月29日撮影

そうした活平地区の歴史資料としての記録性、丸岡三一という名工との関係性、刺繍絵馬という特殊性、浦幌に現存する社寺絵馬としては二番目に古いという資料性の観点から、この絵馬は浦幌町の有形文化財に指定することが望ましいと考えられる。現在、浦幌町文化財保護審議会で検討をするべく、博物館で準備を進めている。

おわりに

故郷の広島を離れ、不慣れな北海道の浦幌で65年間を過ごし、三一と家族を支え続けたキサノは、1983（昭和58）年３月23日に、88歳で他界した。墓所は、これもかつて広島からの移住者が住職を務めていた浄福寺（浄土真宗西本願寺派）である。キサノはここに、夫の三一、息子の栄三氏と共に眠っている（図11）。

謝　辞

丸岡家の沿革について、北広島市在住の丸岡繁喜氏には、聞き取り、資料や写真の借用など、調査にあたってご協力いただいた。浦幌町の荒川和子氏にも、資料や情報の提供をいただいた。活平神社の調査にあたり、浦幌神社宮司の背古宗敬氏、活平神社管理者の阿部優氏、博物館実習生（帯広畜産大学大学生、当時）の元木咲氏に協力いただいた。『活平の歩み』の調査にあたり、帯広百年記念館所蔵の「井上壽資料」を使用し、同館の大和田努学芸員に協力いただいた。

皆様に深謝したい。

註

註1）丸岡三一の生没年については、丸岡繁喜氏の資料に記述があったが、丸岡キサノの生年については不明であった。そこで、本報におけるキサノの生年については、浦幌町本町の浄福寺境内にある丸岡家の墓石に掘られている、キサノの年齢および没年から算出したものである。

註2）広島県三次郡川地村下志和地は、1898（明治31）年に三次郡と三谿郡が合併して双三郡となったことにより双三郡川地村下志和地となり、1956（昭和31）年に川地村が双三郡から三次市へ編入されたことにより、三次市下志和地町となった。

註3）川地尋常小学校か志和地小学校のいずれかを指すと思われるが、現在調査中。川地尋常小学校は1896（明治29）年に上志和地尋常小学校と下川立尋常小学校を合併して川地尋常小学校と改称した際に，高等科２年を併設している。志和地小学校の明治・大正期の実態は不明。両校は2012（平成24）年に統合し、現在は三次市立川地小学校となっている。

註4）広島県高田郡小田村大字下小原は1956（昭和31年）に合併して高田郡甲田町へ編入し、さらに2004（平成16）年に甲田町が合併して安芸高田市へ編入されたことにより、安芸高田市甲田町下小原となった。

註5）丸岡繁喜氏の調べでは、荒川時蔵が広島から活平へ入った年月日として「明治39年２月14日」という記述がある。今後、文書記録などを照合する必要があるが、本報では、『浦幌村五十年沿革史』（浦幌村社會教育協會1949）や『活平の歩み』（水野1989）の記述によった。

註6）丸岡繁喜氏の父にあたる丸岡栄三氏が2000年５月に書き残した手書きの手記「北海道移住～昭和20年代までの流れ」による。この手記はコピーが丸岡繁喜氏の手元に残っているが、原本はみつかっていない。栄三氏の視点から、丸岡家の活平から留真への移転、さらに宝町への移転について綴られている。丸岡繁喜氏所蔵。

註7）浦幌炭鉱は1918（大正７）年の開坑。当初から毛無、常室と共に留真に坑口を置いたが、常室と留真は条件が悪く、ほどなく毛無のみからの出炭となったされる。留真坑口が再開したのは1933（昭和８）年とされる。

註8）『浦幌町郷土博物館報告』の第２号（1973）から第７号（1976）にかけて「中浦幌駅逓所と中川北松」と題して連載されている、シンポジウムの記録集。

註9）中川北松（1869-1951）。福井県の出身で、1896（明治29）年に北海道へ渡り、１年間を渡島地方で過ごしたのち、翌年に十勝へ入った。熊谷農場へ入ったが、1908（明治41）年に留真へ中浦幌駅逓所を開設することになると、妻のあき（1880-1960）と共に駅逓の管理人を務めた。

註10）1898（明治31）年に、当時すでに生剛、下浦幌地区で農場経営に着手していた熊谷泰造が、橋本順造と連名で、活平から喫茶牛付近までの牧場貸付を受け、上浦幌熊谷農場と呼ばれた。1904（明治37）年５月に熊谷農場の土地が熊谷泰造、鷲見邦司、橋本順三の三氏に分割され、このうち下川流布から活平口に至る土地は鷲見邦司の領分となり、管理者として当時円山に居住していた朝日浅吉が就いた。1908（明治41）年に上浦幌駅逓所の管理人となった朝日は、それを機に活平へ移住し、農場の管理と鷲見農場の管理をこなした。この頃から、鷲見農場は管理人の名をとって朝日農場とも呼ばれている。

註11）「丸岡キサノ（祖母）の手記」。丸岡栄三氏の遺品から見つかったものとされる。文面から、執筆は1977（昭和52）年１月で、内容は前年末に受けた手紙への返信である。丸岡繁喜氏所蔵。

引用文献

博物館報告編集局，1975．中浦幌駅逓所と中川北松（V）．浦幌町郷土博物館報告，6, : 2-6.

事業部記念誌係，1976．開校七十年記念誌かつひら，p27.活平小学校開校七十周年記念祝賀協賛会，浦幌.

水野勝次，1989．活平の歩み．自費出版.

持田誠，2019．厚内神社史．浦幌町立博物館紀要，19 : 9-11.

浦幌町史編さん委員会, 1971．浦幌町史．浦幌町役場，浦幌．922pp.

浦幌町百年史編さん委員会，1999．浦幌町百年史．浦幌町役場，浦幌．823pp.

浦幌村社會教育協會，1949．浦幌村五十年沿革史．浦幌村役場，浦幌．424pp.

採集記録・観察記録

浦幌のウチダザリガニ駆除（2018・2019年）

円子 紳一[1)]

Shinichi Maruko, 2020. The extermination of *Pacifastacus luniusculus trowbridgii* in Urahoro, easten Hokkido, 2018·2019
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 31-32.

はじめに

「浦幌の自然を楽しむ会」によるウチダザリガニ *Pacifastacus luniusculus trowbridgii* 駆除は５年を経過した。この間、年間の駆除回数が大きく変わらないのに、駆除頭数は増加傾向にある（表１参照）。駆除頭数増の要因として考えられるのは､捕獲用具の充実、生息環境の理解による捕獲技術の向上などがある。

捕獲用具は、カニカゴ３個は2015年から継続使用だが、たも網は15年の３本から16年に10本、17～19年は15本使用した。

捕獲技術は、駆除開始時にはどんな所に潜んでいるのか、どのようにたも網に追い込むかなど手探り状態だったが、経験を積むことで少しずつコツがつかめるようになっていった。

2018年・秋の旧オベトン川で大量に確認

2018年７月28日の「ウチダザリガニ　バスターズ」に参加した小学生が、後日、森林公園内で捕獲した個体が何かわからず博物館に持ち込んだ。紛れもなくウチダザリガニであった。発見場所は同公園の沢で、市街地区を通過し下流で浦幌川に合流する旧オベトン川の上流域だった。この流域では初めての確認だったので、生息状況の調査を行った。

９月17日に持田誠学芸員と円子が、旧オベトン川と浦幌川の合流地点から森林公園からの合流地点（以下公園橋という）までを遡った。浦幌川との合流地点は落差工があった。流れの落ち際から100メートルほど上流まで、浦幌中学校正門前の学園橋（ここは深めの汚泥状態)、公橋橋の３カ所でウチダザリガニ132匹の生息を確認した。特に公園橋では69匹を捕獲した。

９月21日に吉原敬司氏と円子が森林公園の合流地点で116匹を捕獲。10月８日には吉原氏が474匹、円子が46匹の合計520匹を捕獲した。円子は町民球場横までの約80メートルを遡ったところ、上流に向かうほどに生息密度は低下し、２個目の落差工付近では確認出来なかった。11月17日は佐藤芳雄氏と円子でこれまでで一番遅い時期の駆除作業となったが、6匹の捕獲にとどまった。既に冬眠用の穴に入ったのだろうと思われた。

2019年・春の旧オベトン川でも大量に確認

19年は浦幌川でカニカゴ４回、オベトン川でたも網３回（同時にカニカゴＩ回)、旧オベトン川でたも網２回の駆除作業を行った。

５月12日の旧オベトン川では公園橋付近で201匹とやはり大量捕獲となった。アイスアリーナ奥の小沢

表1　捕獲数の推移

単位：匹

性別	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	計
♂	55	60	78	101	74	368
♀	45	103	90	347	169	754
不明	11	37	124	738	298	1, 208
計	111	200	292	1, 186	541	2, 330

1) 浦幌の自然を楽しむ会（〒089-5634 北海道十勝郡浦幌町字帯富）

には以前(今も？)、ニホンザリガニが生息していた(未発表)。森林公園とは峰を隔てて同じ水系である。

北海道と浦幌町では、2004年に策定した「浦幌都市計画区域の整備・開発及び保全の方針」の見直しを進めている。その素案には「浦幌川、オベトン川及び旧オベトン川を主とする河川については、各種開発事業等との調整を図りつつ、総合的な治水対策を促進するとともに、親水機能にも配慮した自然と触れ合う水辺空間の活用や、総合的な治水対策等に努める」とある。

ウチダザリガニが大量に生息している公園橋地点は、ガマが生育していて根元は格好の棲みかとなっていると思われる。ここから浦幌川との合流点までは、ほぼ全域で川底は汚泥状態で足を踏み入れることも難し箇所が多い。汚泥対策だけでもウチダザリガニの生息に不向きな環境を作り出せるのではないか。また、水流の回復は悪臭対策にもつながり、生活環境も良好になると考えられる。この地域がどのように推移するか注目して行きたい。

おわりに

浦幌町に特定外来生物のウチダザリガニが生息していることを子どもたちに伝える「ウチダザリガニ　バスターズ」を2016年から行っているが（円子 2017、2018)、これからも継続することで子どもたちに浦幌の自然の一端を知ってもらいたいと思う。また、2020年３月には町の「笑顔輝く地域づくり支援事業」の活用でウチダザリガニの生態などを解説したクリアファイルを作製。町内４小・中学校の児童生徒に配布し啓蒙した。

町内の河川でのウチダザリガニによる被害などは確認できていないが、ニホンザリガニとの接触が憂慮されることから、小さな活動であるが引き続き駆除活動を進めて行きたい。

駆除活動の中心となっている「浦幌の自然を楽しむ会」のみなさん、町立博物館の持田誠学芸員、北海道ウチダザリガニ防除ネットワークの高橋克巳代表、齊藤さゆりさん、「ウチダザリガニ　バスターズ」に参加いただいたみなさん、野生動物保全技術実習を行った酪農学園大学の佐藤喜和教授や学生のみなさんに心から感謝申し上げる。

なお、本調査・駆除経費の多くは、浦幌町の「笑顔輝く地域づくり支援事業」の補助金を得て行われたものである。

引用文献

円子紳一．2017．浦幌のウチダザリガニ駆除（2016年）．浦幌町立博物館紀要．17：9-11

円子紳一．2018．浦幌のウチダザリガニ駆除（2017年）．浦幌町立博物館紀要．18：15-18

採集記録・観察記録

浦幌川におけるモクズガニの記録

円子紳一[1)]・持田 誠[2)]

Shinichi Maruko & Makoto Mochida, 2020. The record of *Eriocheir japonica* in Urahoro river, Tokachi, Hokkaido
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 33-34.

国内で食用として利用されているモクズガニ（イワガニ科 *Eriocheir japonica* (de Haan)）の生息が、浦幌川で確認された。国内では普通種で、道内各地に広く分布しているとされるが、道東・十勝では生息情報が少ない。

2019年６月25日の「浦幌の自然を楽しむ会」のウチダザリガニ駆除作業中に、浦幌川の森永乳業裏（図２A）にある水深50～60㎝のコンクリート落差工で雌１尾が捕獲された（図１）。甲幅は51㎜で標準サイズだった。７月11日にも同所で雄１尾と雌３尾が確認された。

会員は「今まで見たことがない。数人に聞いたが生息を知っている人はいなかった」と話していたが、町の広報誌（2019年８月号）の「博物館の窓」で紹介されたモクズガニの記事を見た数人の町民から、数年前に見たことがあるなどの情報が寄せられている。

中村剛氏は、2018年の７月に、浦幌川の第一橋界隈（図２C）において釣りの最中に、足を拡げると約25cmの個体が足元を歩いて行く様子を確認している。中村氏によると、「４年ほど前には確認出来なかったと思うが、何故かヤマベが爆発的に増えた頃から、かなり沢山の個体が還ってきているように思う。何か

図1　浦幌川で2019年6月25日に採集されたモクズガニ

表1　浦幌で捕獲されたモクズガニの記録

No.	捕獲月日	捕獲場所	性別	甲長 ㎜	甲幅 ㎜	体重 g	計測
1	6月25日	浦幌川 森永裏段差	♀	48.6	51.0	60.0	死後計測
2	7月11日		♀	44.8	46.7	100.0	生体計測
3			♀	41.4	42.6	95.0	
4			♀	44.4	44.7	50.0	
5			♂	37.3	36.7	71.0	
6	9月18日	浦幌川河口	♂	59.5	64.0	100.0	死後計測
7			♂	61.5	64.5	110.0	
8			♀	57.5	60.0	80.0	
9			♀	61.5	63.5	85.0	

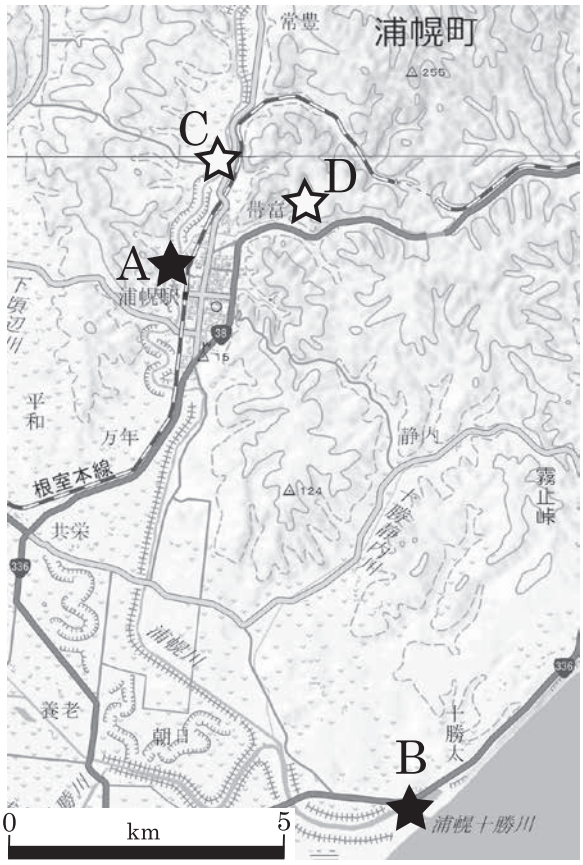


図2　浦幌川流域でのモクズガニの確認地点
（国土地理院1:200,000地形図「帯広」に加筆）

1) 浦幌の自然を楽しむ会（〒089-5634 北海道十勝郡浦幌町字帯富）
2) 浦幌町立博物館　（〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町）

因果関係があるのか、いずれにしても嬉しいこと」と話している（中村氏私信）。

また、帯富地区（図２D）で農業を営む元木一彦氏からは、「かつてこの辺りの沢にサワガニがいた」との情報を寄せられた。このサワガニは、モクズガニを指している可能性が高い。

同年９月18日には、西垣隆夫氏が浦幌川河口域（図２B）で捕獲した４匹のモクズガニが博物館に持ち込まれた。浦幌川河口の河岸に設置してある消波ブロックの上にいたものを捕獲したものである。

モクズガニは、日中は転石などの物陰に隠れていて、夕暮れに活動する夜行性のため、人目に触れないことが観察例の少ない要因となっているようだ。

浦幌の自然を楽しむ会が６月に行った「第16回身近な水環境の全国一斉調査」で、浦幌川中流域の測定値が「２」（きれいな水）だったことから、浦幌川が生き物にとって住みやすい環境にあると考えられる。

モクズガニは降河型の通し回遊を行う種で、成熟個体が川を下り海域で産卵し、海域で生まれた幼生はその後成長を続けながら海水域に達する。35～70㎜になると成熟し、秋期から冬期にかけて淡水域から感潮域の下流部および海域に降河して、春期に産卵する（坂下 2003）。ふ化したゾエア幼生は、数カ月にわたる海での浮遊生活期間中に脱皮して、メガロパ幼生に変態する。メガロパ幼生は塩分がわずかに感じられる程度の水域に着底し、底生生活を開始し、脱皮して稚ガニとなる。北海道では甲幅7㎜程度まで成長すると初夏から秋にかけて川を上る（上田ほか 2005）。上中流域で２～３年生活し、脱皮を繰り返しながら成熟し降河する（坂下 2003）。

図3　2019年9月18日に浦幌川河口で採集されたモクズガニ（腹側）。上段2匹がオス、下段2匹がメス

標　本

モクズガニ　*Eriocheir japonica* (de Haan)

#2020-119　Loc. Hokkaido, Tokachi-gun, Urahoro-cho, Zaimoku-cho, underwater of the Urahoro-river / Jun. 25, 2019/ Coll. Shinichi Maruko / adult female 1
採集地：北海道十勝郡浦幌町字材木町、浦幌川水中／2019年6月25日／採集者：円子紳一／雌1

#2020-120　Loc. Hokkaido, Tokachi-gun, Urahoro-cho, Toyokita, on tetrapod at estuary of the Urahoro-river / Sep.18, 2019/ Coll. Takao Nishigaki / adult male 2, adult female 2
採集地：北海道十勝郡浦幌町字豊北、浦幌川河口部の消波ブロック上／2019年9月18日／採集者：西垣隆夫／雄2、雌2

謝　辞

西垣隆夫氏、中村剛氏、元木一彦氏には、浦幌町内での確認情報を提供いただいた。株式会社ズコーシャの堤公宏氏には、十勝や道東での情報や文献情報を紹介いただいた。美幌博物館の町田善康氏には、モクズガニの標本製作法や管理法などについてご教示いただいた。ご協力いただいた皆様に、深く感謝する。

引用文献

坂下拓．2003．モクズガニの生態と北海道の一河川における分布状況．育てる漁業, 363：3-5

上田吉幸、前田圭司、嶋田宏、鷹見達也（編）．2005．漁業生物図鑑「新北のさかなたち」, 394-397．北海道新聞社．

採集記録・観察記録

北海道十勝地方浦幌町でのウズラの確認記録

持田 誠[1)]・百瀬 邦和[1)]

Makoto Mochida & Knikazu Momose, 2020. New Record of *Coturnix japonica*
in, Urahoro, Tokachi region, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 35-37.

はじめに

ウズラ *Coturnix japonica* はキジ科ウズラ属に分類される小型の草原性鳥類である。もともと伝統的な狩猟鳥だったが､明治中期から家禽としての飼養「養鶉」がはじまり、一般には鶏卵と並んで食用卵として広く知られている（奥山 2005）。しかし、野生のウズラは、全国的には1960年代から狩猟シーズンの捕獲羽数が減少傾向にあり、特に1980年代に激減した（木村 1991）。一方、北海道での最多捕獲年代は1960年代と、本州以南よりも遅かったが、やはり以後同じような減少傾向にあるとされる（奥山 2004）。

筆者のうち百瀬は、2019年夏に、浦幌町の静内川沿いでウズラに遭遇した。浦幌での確認事例は近年きわめて少ないので、記録として報告する。

確認状況

確認地点は、北海道十勝郡浦幌町字下浦幌、静内川右岸の未舗装の堤防道路上（42°44’55”N, 143°40’00”E）である（図１）。確認日時は2019年８月24日15時30分ころ。確認したのは１羽で、道路脇でウロウロしていたところを、自動車のフロントガラス越しに写真を撮影した（図２，３）。筆者が道東でウズラを実見のは、これが初めてである。

浦幌周辺での確認記録

浦幌野鳥倶楽部の観察記録によると、浦幌では、1994年７月２日、1996年７月13日に平和の草地（浦幌野鳥倶楽部 2000）、2000年に愛牛の草地、2006年１月８-９日に豊北の河川敷（浦幌野鳥倶楽部

図1　2019年８月24日のウズラ確認地点（●のところ）
国土地理院地勢図1:200,000「帯広」に加筆

図2、図3　2019年８月24日に確認されたウズラの写真。２枚とも同一個体。百瀬邦和撮影。

1) 浦幌町立博物館　〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町16
2) タンチョウ保護研究グループ　〒085-0036　北海道釧路市若竹町9-21

図4　2012年12月15日に浦幌町豊北で確認されたウズラ2羽のうち１羽の写真。円子紳一氏撮影

図5　2012年12月15日に浦幌町豊北で確認されたウズラ2羽の写真。円子紳一氏撮影

2009）で観察されている。なお、いずれも繁殖は未確認とされる（浦幌野鳥倶楽部 2000、2009）。

また、2012年12月15日に、浦幌町の豊北付近において円子紳一氏の観察記録があり（未発表）、写真が残されている（図４）。このときは２羽が一緒に確認されている（図５）。

十勝地方全域での繁殖期におけるウズラの生息状況については、藤巻（2010）が1976-2009年までの、観察および文献記録をまとめており、浦幌町からも１件が記録されている。

環境省の2002年以降の調査では、2012年６月に、隣接する豊頃町における確認が報告されているが、ここでの浦幌町からの確認はなく、（環境省 2014a）前後の調査を集計した奥山（2005）の分布図も十勝川河川敷付近に記録があるのみである。

なお、東十勝地方での記録としては、幕別町の依田公園で1984-97年の間に確認が報告されている（エコネットワーク 1997）。近接の地域からは1970～90年代に大樹町の記録があるが（飯島1986、1998）、音別町など釧路側の記録はみられない（藤巻 2010）。

これらの記録のうち、特筆されるのは冬の観察記録であろう。ウズラは、北海道以北では夏鳥として飛来し、本州中部以北で繁殖するとされている（清棲 1978）。実際、環境省（2014a）における越冬期の記録は、本州中部以南に限られ、道内での冬の確認事例が無い。

このため、2006年１月（浦幌野鳥倶楽部 2009）と2012年の確認記録（円子，未発表）は、北海道では稀な冬の確認事例といえるだろう。

課　題

環境省は1998年に環境省レッドリストへ情報不足種（DD）として初めて登載し、2007年改訂で準絶滅危惧種NT（準絶滅危惧種）に指定した。このとき同時に狩猟禁止となった。さらに、2012年の第４次改訂によって絶滅危惧II類（VU）とされ、この翌年に狩猟鳥から除外されている（環境省 2014a）。

さまざまな報告から、ウズラは近年、減少傾向にあると考えられている（環境省 2014a, b；高野 2015）。河井ら（2003）は、「かつては全道で広く繁殖していたが、近年著しく減少し、姿のみられなくなった地域が多い」と記している。

環境省はレッドデータブックにおいて、「存続を脅かす要因」として「草地開発、河川敷の樹林か、やレクリエーション用地としての利用など、繁殖地や越冬地における生息環境の減少や悪化」を指摘する一方、「狩猟による影響については不明」と記している（環境省 2014b）。木村（1991）も、日本の野生ウズラの場合には乱獲の記録がみられず、減少の要因は生息地の環境の変化や汚染である可能性を指摘している。

このため、浦幌周辺の生息状況や、生息環境の実態について、科学的な検証が必要と思われる。今後、浦幌野鳥倶楽部の最近の観察記録が2020年中にも刊行される見込みであり、こうした新たな観察記録もまじ

えて一帯の生息状況を把握し、生息環境の変化について調査・考察する必要がある。

謝　辞

浦幌町の円子紳一氏には、2012年に撮影したウズラの写真および情報を提供いただいた。深謝する。

引用文献

エコネットワーク，1997．幕別生きもの調査報告書、64-102．幕別町教育委員会，幕別.

藤巻裕蔵，2010．北海道中部・南東部におけるウズラの繁殖期の生息状況．日本鳥学会誌，59: 55-60.

飯嶋良朗, 1986．大樹の鳥:大樹鳥類目録．自費出版.

飯嶋良朗，1998．大樹の鳥II．自費出版.

環境省, 2014a．ウズラ調査マニュアル．環境省, 東京. 26pp.

環境省2014b．レッドデータブック2014：日本の絶滅のおそれのある野生生物2鳥類, 160-161．ぎょうせい，東京.

河井大輔・川崎康弘・島田明英・諸橋淳，2003．北海道野鳥図鑑．亜璃西社，札幌．399pp.

木村正雄，1991．野生ウズラのツキ網猟および日本における野生ウズラの捕獲羽数の推移に関する考察．日本家禽学会誌，28: 166-169.

清棲幸保，2001．増補改訂版日本鳥類大図鑑II, 735-739．講談社, 東京.

奥山正樹，2004．狩猟鳥ウズラ*Coturnix japonica*の現状．山階鳥類学雑誌, 35: 189-202.

奥山正樹, 2005. 北海道におけるウズラの現状を探る．北海道野鳥だより，139: 4-7.

高野伸二，2015．フィールドガイド日本の野鳥（増補改訂新版）, 194-195．日本野鳥の会, 東京.

浦幌野鳥倶楽部，2000．浦幌鳥類目録．浦幌野鳥倶楽部事務局，浦幌．37pp.

浦幌野鳥倶楽部，2009．浦幌鳥類目録第２版．浦幌野鳥倶楽部事務局，浦幌．37pp.

四、入學願書竝に規則書入用の際は二錢切手を添へて申込み下さい

大正十五年　二月二　日發議　大正　〃年　〃月　〃日議決（紫スタンプ）「大正拾五年貳月四日」發送　淨書㊞校合

村長　㊞　首席　　合議　　主任　　發議者　㊞

番號　浦第　三　二　三　　號　發信者　「村長」（加筆）

宛　名　貴老路学校長　宛

（欄外）完　件　名　特別旅費支出ニ干スル件

結　一月二十六日付第三號ヲ以テ本件御照会ノ處［既（前除）］ニ旅費ニ残

票　ヲ」「予算（加筆）ヲ」有セス支出兼相成候条御了知相成度候

追而別紙出張命令内申ハ經由見合セ不取敢御返戻致置候哉

完結票

村長㊞	枠は朱欄外
首席㊞	
主任㊞	
施行濟	
完結	

第（朱）一八（黒）號（朱）

第三号　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

大正十五年一月二十六日　貴老路尋常小學校小林　朔吉

北海道十勝郡公立貴老路尋常小學校長印

浦幌村長　石原　重方　殿

特別旅費支出ノ件

本校代用教員小林三代ヲ新得村主催羊毛加工講習会ニ出席希望ニ付特別旅費左記ノ通リ御支払被下度此段及照會候也

記

一、往復汽車賃　三等實費

一、講習期間（四日間）　一日弐圓宛

査書

（身体検査書ハ地方受験者ノミ添付スルコト）

五、試験科目、日時　選抜試験ハ左ノ通リ本校及各支廳（根室支廳ヲ除ク）ニ於テ行フ

三月二十五日午前　自　九　時　至十時三十分　算術　自十一時　至十二時　理科

三月二十六日午前　自　九　時　至十時三十分　国語　自十一時　至十二時　地理

決裁印

村長	首席	合議	主任
㊞			㊞

完結票

村長㊞	首席㊞	主任㊞	施行濟	完結

根商第一五號　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

大正十五年一月一三日　㊞

北海道廳立根室商業學校長　小川　濬治

北海道廳立根室商業學校長之印

「浦幌村」（加筆）長　殿

生徒募集方依頼ノ件

来ル四月入學セシムヘキ生徒別紙要領ニ依リ募集致候ニ付テハ御繁忙中御迷惑トハ被存候得共御管下小學校ニ對シ志望者募集方何卒宜敷御依頼申上候

廳立根室商業學校生徒募集

募集學年及人員

一　學　年

● 入學志願者資格

一、尋常小學校の課程を卒へたるもの

二、身體健全にして品行方正なるもの

三、年齢十二年以上のもの

● 受験科目

讀書、算術、地理、理科、の四科目であります

● 志願手續

入學志願者は左記書類に金參圓を添へ三月一五日迄本校に差出しなさい

一、入　學　願　書

二、成　績　証　明

三、身　體　檢　査　證

身体檢査證は地方受験者のみ添付するのであります

● 試験科目、日時

選抜試験は左の通り本校及各支廳（根室支廳を除く）に於て行ひます

三月二十五日午前　自　九　時　至十時三十分　算術　自十一時　至十二時　理科

三月二十六日午前　自　九　時　至十時三十分　國語　自十一時　至十二時　地理

本校に於て受験する者は兩日午後身体檢査を行いひますから辨當を持參しなさい

● 其他の注意事項

一、一旦提出した書類及入學試験手數料は何等の事由あるもお返しません

二、入學を許可競られた者は三月二十八日本校内に掲示します

三、本人より電報料三十錢前納の場合は特に直接御通知申します其際本校ノの電信略號は「コン」を用います

記

桃山報徳会堂利用ニ關スル件

報徳会ハ桃山御陵下ニ於テ教育勅語ノ御趣旨ヲ普及シ其徹底ヲ期スルヲ目的トシ月刊雑誌「報徳」ヲ発刊スル外各地ニ於テ講演会ヲ開催シ社会教化事業ニ努力致居候処約一千人ヲ収容シ得ル報徳会堂客年十一月末竣工シタルヲ以テ各地ヨリ桃山両御陵竝乃木神社参拝スル学生々徒青年團処女会其他團体ニシテ先帝陛下ノ聖徳乃木大将ノ経歴其他国民精神作興ニ關スル講演者希望ノ向キハ日時、團体名人員、希望演題竝ニ之ニ費シ得ル時間等予メ御通知相成候ハヽ、貴□ニ應スヘキ趣ヲ以テ周知方同会ヨリ依頼越候条貴管内関係ノ向ヘ周知方御取計相煩度及御依頼候也

枠は朱

村長	首席	議員	主任
印			印

完結票

村長	印
首席	印
主任	印
施行済	
完結	

第（朱）一六（黒）號（朱）

教第三六號

「一月二八日」（朱加筆）

大正十五年一月十三日

「受付印有」（紫スタンプ）

「浦幌村長」（朱加筆）

河西支廳長　那須　正夫

「各小学校長　殿」（朱加筆）

各町村長殿

廳立根室商業學校生徒募集ノ件

「別紙」（朱加筆）

完（欄外）

決（欄外）

裁

印

決　来ル四月入學セシムヘキ生徒「左記」（朱）ニヨリ募集致度趣ヲ以テ当

票　該學校長ヨリ依頼越ノ次第モ有候条「貴部内ヨリ」（朱）可成多数出願スル様一般周知方御配慮相煩度「相成候様致」（朱加筆）

追而詳細ハ直接当該學校長ヘ照会「セシメラレ」（朱）度申添候

「移牒可然哉」（欄外）

枠は朱欄外

第（朱）一七（黒）號（朱）

左記

一、募集學年及人員　第一學年　約百名

二、乳學志願者資格　（イ）尋常小學校ノ課程ヲ卒ヘタルモノ

（ロ）身體健全ニシテ品行方正ナルモノ

（ハ）年齢十二年以上ノモノ

三、受験科目　受験科目ハ尋常小學校卒業程度ニ依リ讀方、算術、理科ノ四科目〔マヽ〕トス

四、志願手續　入學志願者ハ左記書類ニ金参圓ヲ添ヘ三月十五日迄ニ本校ニ差出スコト

（一）入學願書　（二）成績証明書　（三）身體検

大正十五年　一月二八日發議　大正　〃年　〃月　〃日議決「大正拾五年壹月卅日」（紫スタンプ）發送　浄書㊞校合

村長　㊞　首席　　合議　　主任　　發議者　㊞

番號　浦第　二　七　七　　號　發信者　「浦幌村長」（加筆）

宛　名　各小学校長　殿

件　名　十勝農業学校生徒募集ノ件

左記ニ依リ生徒募集方当該学校長ヨリ依頼越候条御勧誘方御配意相願度

完（欄外）

結　記

票

一、募集人員　　農　科　約四十名
　　獣医科　約四十名

一、出願期限　　二月末日

一、試験期日　　三月四、五、六日

一、入学資格

○高等小学校第二学年若クハ中学校第二学年ヲ終了シタル者

○年令満十四才以上ノ者ニシテ高等小学校第二学年程度ノ特別試験ニ合格シタ者

一、入学案内ハ十勝農業学校ニ請求スル事

完結票

枠は朱欄外

村長	㊞
首席	㊞
主任	㊞
施行濟	
完結	

第（朱）一五（黒）號（朱）

拝啓時下御愈御清祥奉賀候　㊞　「受付印有」（紫スタンプ）

陳者本校生徒募集ニ關シテハ毎年多大ナル御高配ニ預リ候段奉深謝候本年モ別紙ノ如ク募集入學セシメ度候ニ付テハ御勧誘方御依頼致度猶御手数恐縮ニハ候へ共別紙印刷物ヲ適當ノ場所ニ御掲示ノ上志望者ニ対シテハ可然御教示相煩度此段御依頼申上候

敬具

大正十五年一月二十三日

廳立十勝農業學校長　中村　精一

殿

判読	
できず	

決　教第三八號

栽　「一月二十八日」（朱加筆）

印　大正十五年一月十五日

「移牒可然哉」（欄外）

河西支廳長　那須　正夫

「浦幌村長」（朱加筆）

完結票

「各小学校長（朱加筆）
各青年分團長　宛」
各町村長　殿

桃山報徳会堂利用ニ關スル件

京都府ヨリ桃山報徳堂利用ニ干シ左記之通リ依頼越候条貴部内関係ノ向エ周知方御取計相成度　「御承知置相成度」（朱加筆）

大正十四年十二月十日

「受付印有」（紫スタンプ）

十勝青年学校長　那須　正夫

十勝青年學校長之印

「浦幌青年団長」（加筆）　殿　㊞

大正十四年度本校負担金ニ関スル件

大正十四年度本校負担金ノ豫算額貴團ノ分百七十五円ニ有之候来ル二十五日迄ニ御送納相成度尚右豫算ノ範囲内ニ於テ実行可致見込ニ候へ共道廳補助金ノ關係上追加可成ルヤモ計難ク候ニ付豫メ御含ミ置相成度此段及御依頼候也

浦幌教室　十勝青年學校

月	日	曜	一時	講師	二時	講師	三時	講師	四時	講師	五時	講師	備考
一二	二三	水	始業式		公民		数學		英語		農		
	二四	木	数學		農（畜）	田村	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	二五	金	農（畜）	田村	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	二六	土	農（畜）	田村	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	二七	日	地歴	小林	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	二八	月	地歴	小林	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
一	六	水	國漢	佐藤	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	七	木	國漢	佐藤	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	八	金	數學		全上		英語		公民		全上		
	九	土	地歴	小林	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	一〇	日	地歴	小林	全上	〃	全上	〃	全上	〃	全上	〃	
	一一	月	数學		全上		英語		全上		農		
	一二	火	数學		全上		英語		公民		農		

五									二																				
九		七	六	五	四	三	二		一	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三
日		日	土	金	木	水	火		月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水
体育		英語	数學	公民	数學	英語	数學		英語	國漢	國漢	数學	英語	数學		地歴	地歴	英語	数學	英語	数學	公民	國漢	國漢		数學	数學	数學
吉村										佐藤	佐藤					小林	小林						佐藤	佐藤				
全上		数學	全上	数學	英語	数学	英語		数學	全上	全上	全上	数學	公民		全上	全上	公民	英語	数學	英語	数學	全上	全上		全上	全上	全上
〃										〃	〃					〃	〃	三島					〃	〃				
全上		公民	英語	公民	全上	英語	全上		公民	全上	全上	英語	公民	英語		全上	全上	全上	全上	公民	全上	英語	全上	全上		農	英語	
〃		高橋		高橋					高橋	〃	〃		高橋			〃	〃	〃		高橋	高橋		〃	〃				
全上		全上	公民	全上	公民	農	公民		全上	全上	全上	農	全上	農		全上	全上	全上	公民	全上	全上	公民	全上	全上		全上	全上	全上
〃							高橋		〃	〃	〃		〃			〃	〃	〃	三島	〃		鈴木	〃	〃				
全上		農	農	農	農	全上	全上		全上	全上	全上	農	全上	農		全上	全上	全上	全上	英語	英語	全上	全上	全上		農	農	農
〃							〃		〃	〃	〃		〃			〃	〃	〃	〃				〃	〃				

浦幌村長　石原　重方　殿

青年學校生徒募集ニ關スル件

浦第三五九〇號本月十九日附ヲ以テ御照会相成相候該校へ出席者氏名別紙ノ通リ及回答候也

留真青年分團
青年學校入学希望者

氏名	生年月日	保護者氏名
岡本秋雄	明治三八、五、一五	岡本喜市
本田喜市郎	〃 四二、六、一五	本田市松
宮本髙雄	〃 四三、一、一〇	宮本久松
河内甚作	〃 四二、一〇、一二	河内治作

大正十四年十二月十九日發議　大正　〃年　〃月　〃日議決　大正14年12月19日發送　浄書㊞校合

村長㊞　首席　合議　主任　發議者

番號　浦第　三五九〇　號　發信者　「村長」(加筆)

(欄外加筆)可致当日ハ當該校長（支廳長）臨席ノ筈ニ付御繰合セ上参列候様

宛名　各小學校長　宛
青年團

件名　青年学校授業開始並ニ生徒募集方ノ件

十勝青年學校経営ニ關シテハ尓來格段ノ御配慮相煩シ居リ候処昨年度ニ引續キ別紙時間割ニ依リ本年度ノ授業開始可致旨通牒有之候ニ付テハ奮ッテ出席方各方面ニ亘リ御勧誘相成度出席者氏名ハ直チニ御回報相成候様致度「尚来ル二十三日午前九時ヨリ始業式挙行」(黒)此段及照會通知候也

追而本青年學校本別教室ヲ便宜トセラルル地方ハ本別尋常高等小学校ニツキ詳細御了承相成度尚出席者氏名ハ折返シ回報相願度申添候

㊞　「受付印有」(紫スタンプ)　㊞

大正十四年十二月二日　十勝青年學校長

十勝青年學校長之印

㊞

「浦幌」(加筆)村青年團長「石原　重方」(加筆)　殿

授業開始並ニ生徒募集方依頼ノ件

本校経営ニ關シテハ格段御配慮ヲ蒙リ居リ候処昨年度ニ引續キ本月二十日ヨリ本年度ノ授業開始可致夫々準備罷在候就イテハ御多忙中甚タ御迷惑ノ義ト被存候へ共生徒出席方御勧誘相成度特及御依頼候也

追テ教室使用ニ就イテハ可然御便宜御取計被下度申添候也

㊞

目　録（第二十号令和元年度紀要原稿）

番號	件名
一四	十勝青年学校ニ關スル件
一五	十勝農業学校生徒募集ノ件
一六	桃山報徳会書利用ニ關スル件
一七	廳立根室商業学校生徒募集ノ件
一八	特別旅費支出ニ干スル件

分第五十五號　㊞

大正十五年一月十五日　上川ロップ青年分團長

浦幌青年團長　殿

青年学校入学者報告之件

兼テ御通知相成候青年学校入学者左記之通リ本村青年学校へ通学致候条右及報告候也

記

上川ロップ青年分團正團員

林　重雄

以上

完（欄外）

結

票

枠は朱欄外

第（朱）一四（黒）號（朱）

完結票

村長㊞	
首席㊞	
主任㊞	
施行濟	
完結	

大正十五年一月九日　奉公青年分團長　荒　新一郎　㊞

「受付印有」（紫スタンプ）

浦幌村長　石原　重方　殿

十勝青年學校入學ニ關スル件

本件ニ關シ曩ニ浦第三五九〇号ヲ以テ通牒有之候十勝青年學校生徒募集ニ關シテハ其の後極力勧誘致候処今回左記二名出席致ス事トナリ便宜ノ為メ本別校教室ニ本月六日ヨリ出席致居候間此の段報告候也

記

荒　新二郎　林　茂

青第三四號　㊞

大正十四年十二月二十二日　㊞

「受付印有」（紫スタンプ）　㊞

留真青年分團長　花見　八百三

北海道十勝郡浦幌青年留真分團長印

浦幌町立博物館紀要　第20号　2020年3月

資料紹介

大正十五年 昭和元年 教育雑件〔その五〕

浦幌村役場

三浦 直春・大和田 努 解読

本報は、浦幌町立博物館所蔵の「大正十五年　昭和元年　教育雑件」（浦幌村役場）簿冊に綴られた各文書を翻刻したものである（図1）。各文書の内容については、冒頭に目録が綴られており、紀要第16号（2016年発行）に掲載してある。本号には目録の文書番号一〇から一三までを掲載した。

各文書については、紀要に文書毎に分割して掲載している。なお、掲載の順序は、原則として「教育雑件」に綴られている順序とする。

翻刻は、浦幌町立博物館ボランティアの三浦直春が担当してきたが、三浦が2018年に逝去したため、帯広百年記念館学芸員の大和田努が引き継いだ。

※原資料は浦幌町立博物館で収蔵していますが、資料の劣化防止などのため、展示公開はしていません。調査・研究上の理由で必要な場合には、所定の手続きにより閲覧する事が可能です。原資料の閲覧が必要な場合は、博物館までお問合せ下さい。

〔浦幌町立博物館学芸員〕

図1　大正十五年　昭和元年　教育雑件（浦幌村役場）

投稿要領・執筆要領

浦幌町立博物館では、『浦幌町立博物館紀要』への投稿者を募っています。投稿範囲は、浦幌・十勝並びに北海道を含む北方圏に関する論文、短報、資料紹介、新産地情報、調査・観察記録などです。

投稿は随時受け付けておりますので、投稿希望の方は、当館へご連絡下さい。

投稿者への別刷りは、50 部までは無料です。それ以上の印刷については著者負担とします。

なお、投稿原稿は紀要に掲載後、インターネット上で全文を公開します。投稿にあたっては、公衆送信権を含む著作権を当館に帰属して頂きます。

執筆にあたっては、以下の投稿要領・執筆要領を参照の上、原稿を作成ください。

1　投稿要領

＜提出方法＞

原稿は手書きまたはパソコンで受け付けます。投稿の際は、別紙に氏名・タイトル・連絡先を明記して下さい。

手書き原稿の場合は、縦書き・横書きのいずれも 400 字詰め原稿用紙を使用して下さい。

パソコン原稿の場合は、テキスト形式もしくは MS-Word 形式で保存したデータを、打ち出し原稿と共にお送り下さい。

データでの提出は、USB メモリもしくは CD-R で送付下さい。電子メールでの提出にあたっては、投稿用のメールアドレスを別途指示しますので、事前にご連絡ください（博物館の代表アドレスでは受け取れませんのでご注意ください。）

原稿は「紀要原稿在中」と赤書きの上、下記の浦幌町立博物館宛に提出ください。

〒 089-5614
北海道十勝郡浦幌町字桜町 16-1　浦幌町立博物館
電話：015-576-2009

2　執筆要領

＜言語＞

本文は和文に限ります。ただし、タイトル、氏名、所属には英語表記を御用意ください。また、英文アブストラクトを付ける事もできます。

学名、欧文用語および数字は半角文字で記し、句読点はそれぞれテン全角（、）および全角マル（。）とします。

＜引用文献＞

文献は、原則として本文中に引用した文献のみをとりあげ、和文、欧文を含めて著者名のアルファベット順に配列して下さい。

本文中での引用は（持田・加藤 2001a; 持田 2002）、持田ほか（2001）、(Mochida & Kato 1995, 2001b, c)、Mochida et al. (1997) を原則とします。なお、縦書きの場合は、原則として漢数字で表記下さい。

（例）持田誠（二〇一五 a）

下記の表記例を参考にして下さい。

a．論文の場合は、著者名．発行年．表題．掲載雑誌名 巻（号）：ページ．と表記する。

（例）上赤博文．1995．田手川の植物群落と植物相．佐賀自然史研究 1(1)：5-16.

b．単行本の場合は、著者名．発行年．書名．ページ数．発行所，発行地．と表記する。

(例)伊藤秀三．1994．島の植物誌．246pp．講談社, 東京.

c．単行本（分担執筆）の一部を引用する場合は, 著者名．発行年．章名．本の編者名，書名．章のページ．発行所，発行地．とする。

（例）長田芳和．1997．ニッポンバラタナゴ．長田芳和・細谷和海（編），日本の希少淡水魚の現状と系統保存―よみがえれ日本産淡水魚―．pp.76 – 85．緑書房，東京.

＜脚注＞

脚注は本文末にまとめて記述します。表記は（註 1）の形式とします。本文中では下記のとおり表記して下さい。

（例）・・・と考えられている（註 1）。

＜図表と説明文＞

図表番号は写真も含めて図 1、表 1 とします。

図版、写真、表は、本文へ貼り付けず、1 点ずつ別途お送り下さい。また、図版データは JPG で、表データはエクセルの形式で提出願います。

図は図表、図版とも完全原稿とし、余白または裏に著者名，番号，天地を明記して下さい。また、本文の打ち出し原稿の右余白に図の挿入位置を書き込んで下さい。ただし図版の説明文（キャプション）は図版にはめこまず、図表番号と説明文を別紙 A4 用紙に記入して下さい。図表の説明文には英文を併記することができます。

（2016 年 3 月制定）

浦幌町立博物館紀要　第20号

ISSN 2189-4787

発　行　日　　2020年3月31日

編集・発行　　浦幌町立博物館
〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町16番地１
電話　015-576-2009　　FAX. 015-576-5834（図書館）

印　刷　所　　大同出版紙業株式会社
〒080-0017　北海道帯広市西７条南６丁目２番地
電話　0155-23-5107　　FAX. 0155-23-9032